

平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇六―一四

平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび建物新築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 18 年 11 月

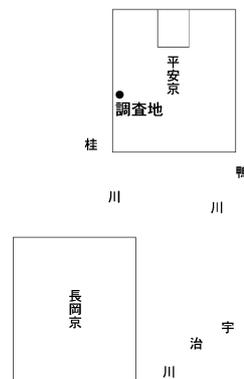
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡
- 2 調査所在地 京都市右京区西院月双町 82
- 3 委 託 者 進洋プランニング株式会社 代表取締役 木村 進
- 4 調査期間 2006年7月24日～2006年9月25日
- 5 調査面積 495 m²
- 6 調査担当者 柏田有香
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「山ノ内・西京極」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 柏田有香
- 18 編集・調整 中村 敦・児玉光世・櫻井みどり・山口 眞

19 今回の調査ならびに報告書の作成にあたり、以下の
方々より有益な御教示を得ました。記して感謝申し
上げます。（五十音順 敬称略）

井上満郎、高正龍、塚原直也、中野咲、西山良平、
萩本勝、吉川義彦



（調査地点図）

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
3. 遺 構	3
(1) 層序	3
(2) 遺構の概要	3
(3) 第1面 平安時代・近世	6
(4) 第2面 古墳時代後期から奈良時代	8
(5) 第3面 古墳時代中期	16
4. 遺 物	19
(1) 遺物の概要	19
(2) 平安時代の遺物	19
(3) 奈良時代の遺物	20
(4) 古墳時代の遺物	24
(5) 縄文時代から弥生時代の遺物	28
5. ま と め	32

図 版 目 次

図版1	遺構	1	第1面全景（東から）
		2	掘立柱建物5（北から）
図版2	遺構	1	第2面全景（東から）
		2	竪穴住居145（東から）
図版3	遺構	1	竪穴住居83（北東から）
		2	竪穴住居83竈（南から）
図版4	遺構	1	竪穴住居144（南東から）
		2	竪穴住居146（南東から）
図版5	遺構	1	竪穴住居147（南東から）
		2	竪穴住居147竈（北西から）
		3	竪穴住居147床面土器出土状況

- 図版 6 遺構 1 竪穴住居 149 (東から)
- 2 竪穴住居 149 竈 (南から)
- 3 竪穴住居 149 壁溝製塩土器出土状況 (南から)
- 図版 7 遺構 1 竪穴住居 149 床面土器出土状況 (北東から)
- 2 土壙 70 土器出土状況 (東から)
- 3 土壙 58 土器出土状況 (北西から)
- 図版 8 遺構 1 第 3 面全景 (東から)
- 2 竪穴住居 242 (南東から)
- 図版 9 遺物 出土遺物 1
- 図版 10 遺物 出土遺物 2
- 図版 11 遺物 出土遺物 3

挿 図 目 次

図 1 調査前全景	1
図 2 作業風景	1
図 3 調査地と周辺調査位置図 (1 : 5,000)	2
図 4 調査区配置図 (1 : 500)	3
図 5 断面図 - 1 (1 : 80)	4
図 6 断面図 - 2 (1 : 80)	5
図 7 第 1 面遺構平面図 (1 : 200)	6
図 8 掘立柱建物 5 実測図 (1 : 80)	7
図 9 柵 6 実測図 (1 : 80)	7
図 10 奈良時代竪穴住居実測図 (1 : 100)	8
図 11 第 2 面遺構平面図 (1 : 200)	9
図 12 竪穴住居 83 竈実測図 (1 : 20)	10
図 13 掘立柱建物 170 実測図 (1 : 80)	10
図 14 竪穴住居 144 実測図 (1 : 80)	11
図 15 竪穴住居 146 実測図 (1 : 80)	12
図 16 竪穴住居 147 実測図 (1 : 80)	13
図 17 竪穴住居 149 実測図 (1 : 80)	14
図 18 竪穴住居 149 床面土器出土状況 (1 : 20)	14
図 19 竪穴住居 150 実測図 (1 : 80)	15

図 20	古墳時代後期竪穴住居竈実測図（1：40）	15
図 21	土壙 58・70・214 実測図（1：20）	16
図 22	第3面遺構平面図（1：200）	17
図 23	土壙 207・237 実測図（1：40）	17
図 24	古墳時代中期竪穴住居実測図（1：80）	18
図 25	平安時代土器実測図（1：4）	19
図 26	落ち込み最上層出土土器実測図（1：4）	20
図 27	溝 85 上層出土土器実測図（1：4）	20
図 28	溝 85 上層出土瓦拓影・実測図（1：4）	21
図 29	溝 85 下層出土土器実測図（1：4）	21
図 30	溝 85 下層出土瓦拓影・実測図（1：4）	21
図 31	竪穴住居 145 出土土器実測図（1：4）	22
図 32	竪穴住居 144 埋土出土土器実測図（1：4）	22
図 33	竪穴住居 83 出土土器実測図（1：4）	22
図 34	竪穴住居 83 出土瓦拓影・実測図（1：4）	23
図 35	竪穴住居 83 出土鉄製刀子実測図（1：2）	23
図 36	竪穴住居 146 出土土器実測図（1：4）	24
図 37	竪穴住居 147・土壙 194・柱穴 193 出土遺物実測図（1：4、1：1）	24
図 38	竪穴住居 149 出土土器実測図（1：4）	25
図 39	竪穴住居 149 出土製塩土器実測図（1：4）	26
図 40	土壙 70 出土土器実測図（1：4）	26
図 41	土壙 58・214 出土土器実測図（1：4）	27
図 42	竪穴住居 144・ピット 74 出土遺物実測図（1：2）	27
図 43	土壙 207 出土土器実測図（1：4）	28
図 44	縄文時代から弥生時代の遺物実測図（1：4、石鏃 1：1）	28
図 45	古墳時代の遺構変遷図（1：500）	32
図 46	奈良時代から平安時代の遺構変遷図（1：500）	33

表 目 次

表 1	遺構概要表	6
表 2	遺物概要表	19
表 3	遺物一覧表	29

平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡

1. 調査経過

調査地は京都市右京区西院月双町 82 で、平安京の条坊では右京六条四坊八町跡に該当する。また、弥生時代から奈良時代の集落跡である西京極遺跡にも含まれる。当地に建物が新築されることになり、京都市文化市民局文化財保護課による試掘調査が行われた。その結果、古墳時代から平安時代の遺構が良好に遺存することが明らかとなったため、発掘調査を実施することとなり、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて本調査を実施した。周辺の調査では、弥生時代後期の竪穴住居や方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居や溝、奈良時代の掘立柱建物がみつまっている。縄文時代に遡る遺物も出土しており、今回の調査でも当該期の遺構・遺物の検出が期待された。

調査は、2006年7月24日から開始した。調査区は当初、南北12m×東西36mに設定した。重機で遺構面まで掘削を行い、約30～40cm掘り下げたところで古墳時代から平安時代の遺構を検出したため、人力掘削に切り替えて調査を行った。第1面として平安時代から近世の遺構の調査を行い、掘立柱建物・柵・土塋などを検出した。続いて第2面として古墳時代後期から奈良時代の掘立柱建物・竪穴住居などの調査を行った。なお、平安時代の掘立柱建物と古墳時代の竪穴住居の規模を確定するため、文化財保護課と原因者の承諾を得て、北と西に調査区を拡張した。そのため、最終調査面積は495㎡となった。また、平安京域での奈良時代の住居跡の発見は稀で、古墳時代の竪穴住居の遺存状態も良好であったことから、8月24日に広報発表、同26日に現地説明会を実施し（参加者約250名）、成果の公表に努めた。図面・写真などの記録終了後、再度重機にて掘り下げを行い、第3面の調査を行った。第3面では、古墳時代中期の竪穴住居を検出した。記録終了後、断割を入れて下層を確認し、断面図を作成した。調査区を埋め戻し、9月25日に全ての調査を終了した。



図1 調査前全景



図2 作業風景

2. 位置と環境 (図3)

調査地は、葛野大路の一筋東側の南北道路と万寿寺通との交差点から北に約60mのところに位置する。旧御室川と西小路通付近に流れていたと想定される旧河川に挟まれた微高地上で、調査前までは、耕作地として利用されていた。京都市遺跡地図台帳では、平安京右京六条四坊八町と、弥生時代から奈良時代の集落跡である西京極遺跡に該当する。敷地西側に面した南北道路は、平安京の山小路をほぼ踏襲している。

周辺の調査については、2006年4～6月にかけて実施された平安京右京五条三坊十四町跡の調査報告²⁾に詳しい。ここでは、当調査地近隣の主要な調査成果についてのみ挙げる。調査地の約60m北西で財団法人京都文化財団が1990年に実施した調査では、平安京五条大路とそれに伴う轍や足跡、古墳時代後期の竪穴住居3棟、弥生時代から古墳時代の溝、縄文時代の土壌などが報告されている³⁾。敷地南に面した箇所⁴⁾で2001年に実施された立会調査では、平安時代中期の包含層と奈良・古墳時代中期の柱穴がそれぞれみついている⁴⁾。約200m北西で1994年に当研究所が実施した調査では、弥生時代後期の方形周溝墓2基と竪穴住居6棟、奈良時代の掘立柱建物、平安時代の柱穴が検出され⁵⁾、1989年に実施した約150m南東の調査でも弥生時代中期から後期の竪穴住居5棟がみついている⁶⁾。また、約200m南で2005年に財団法人古代学協会・古代学研究所が実施した調査では、弥生時代中期の竪穴住居と溝、弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代の竪穴住居などの遺構のほか、古墳時代の勾玉・管玉・白玉が出土している⁷⁾。前述した2006年実施の右京五条三坊十四町の調査⁸⁾では、弥生時代中期から後期の方形周溝墓が6基検出され、西京極遺跡の範囲がさらに広がる可能性が指摘されている。

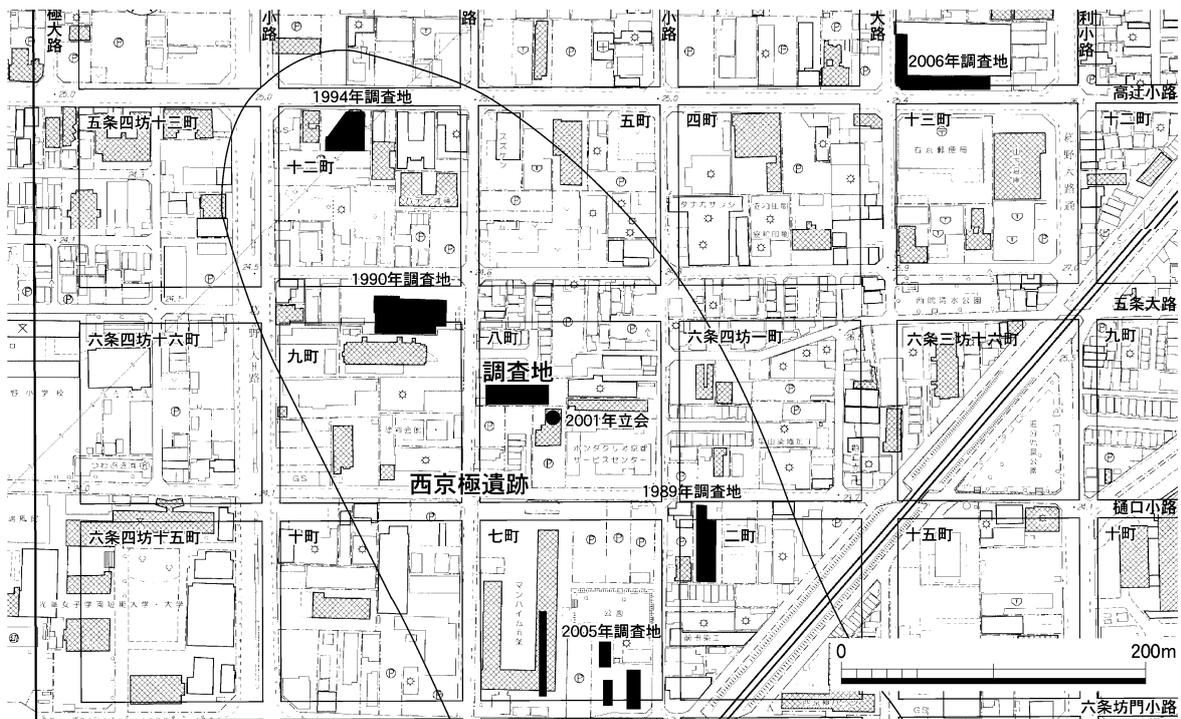


図3 調査地と周辺調査位置図 (1:5,000)

3. 遺 構

(1) 層序 (図5・6)

現地表から約20～25cmまでが現代の耕作土で、調査区東半ではその下に、灰黄褐色の耕作床土(断面図第2層)が薄く堆積する。それを除去した面が、古墳時代から平安時代の遺構成立面となる。ただし、平安時代の遺構面を構成する断面図第3層は、調査区の東半部分(Y=-25,408ラインより東)にのみ薄く堆積する奈良時代の遺物包含層である。また、第4層は調査区全体に10～20cmの厚さで堆積する縄文時代後期から弥生時代の遺物包含層である。それより下は厚さ1.5m以上の無遺物層が堆積している。主体となるのは均質な粘質シルト層であるが、層位が細かく変化し、間に砂層(第10層)が認められる水成堆積であり、炭化物を含むことから縄文時代以前の氾濫堆積物と考えられる。全体的に東下がりの傾斜を示し、調査区の西側を流れていた桂川と旧御室川の氾濫により形成された自然堤防の堆積と考えられる。ただし、葉理は認められず、緩やかに堆積したものと捉えられ、調査地は自然堤防の縁辺に位置すると考えられる。

また、Y=-25,400ラインより東では、断割調査で大規模な落ち込みを確認した。東側は調査区外へと続くため正確な規模は不明であるが、推定で東西幅約15m、深さは2m以上と考えられる。埋土はシルト層を主体とする。上記した調査区西側の堆積状況からみて後背湿地である可能性が高く、このことから、当調査地は自然堤防と後背湿地の境にあると認識される。この落ち込み最上層の第48層は奈良時代の須恵器を多量に含み、その下は古墳時代の土師器・須恵器を含む層、古墳時代の古式土師器を含む層、弥生土器を含む層が堆積し、最下層の第55層には縄文土器が含まれる。このことから、縄文時代から奈良時代にかけて緩やかに埋没が進行したものと考えられる。最終の奈良時代段階では幅約2m、深さ約0.4mの小規模なものとなる。第2面で検出した溝85～89は(図11)、時期と位置関係からみて接続するものであろう。

(2) 遺構の概要

古墳時代後期から近世の遺構を同一面で検出したため、便宜的に第1面として平安時代から近世の遺構を、第2面として古墳時代後期から奈良時代の遺構を調査した。さらにその下層で古墳時代中期の遺構を検出し、第3面として調査を行った。第1面の遺構は調査区西半に集中

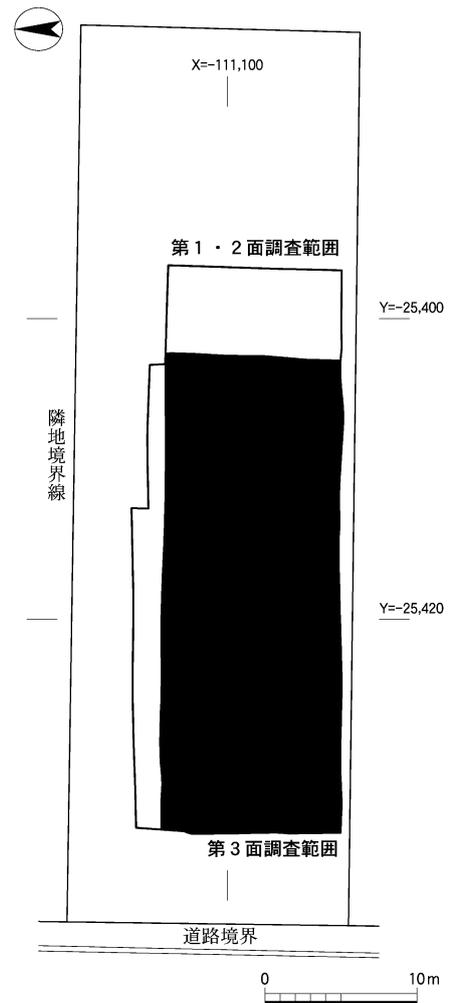


図4 調査区配置図(1:500)

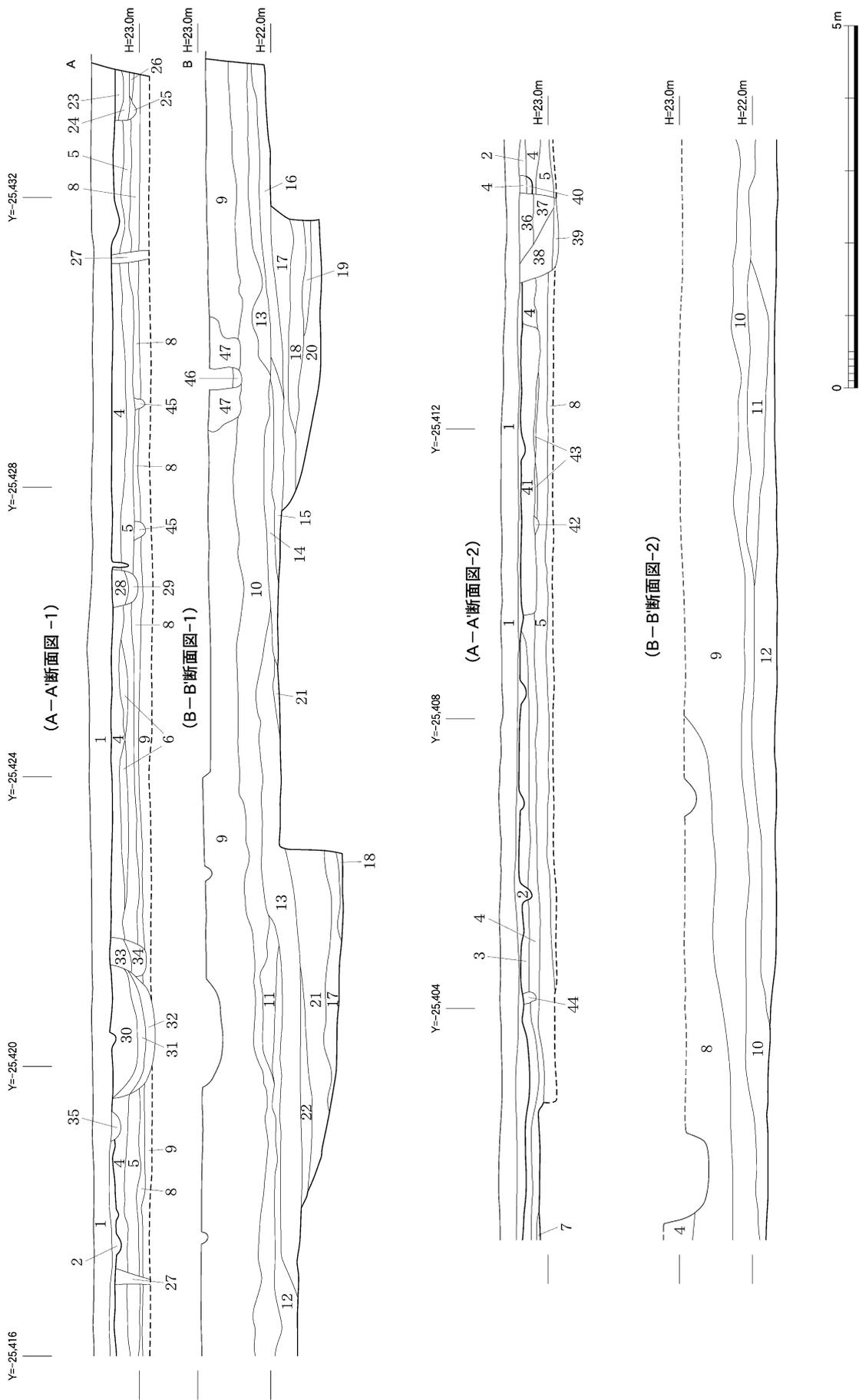
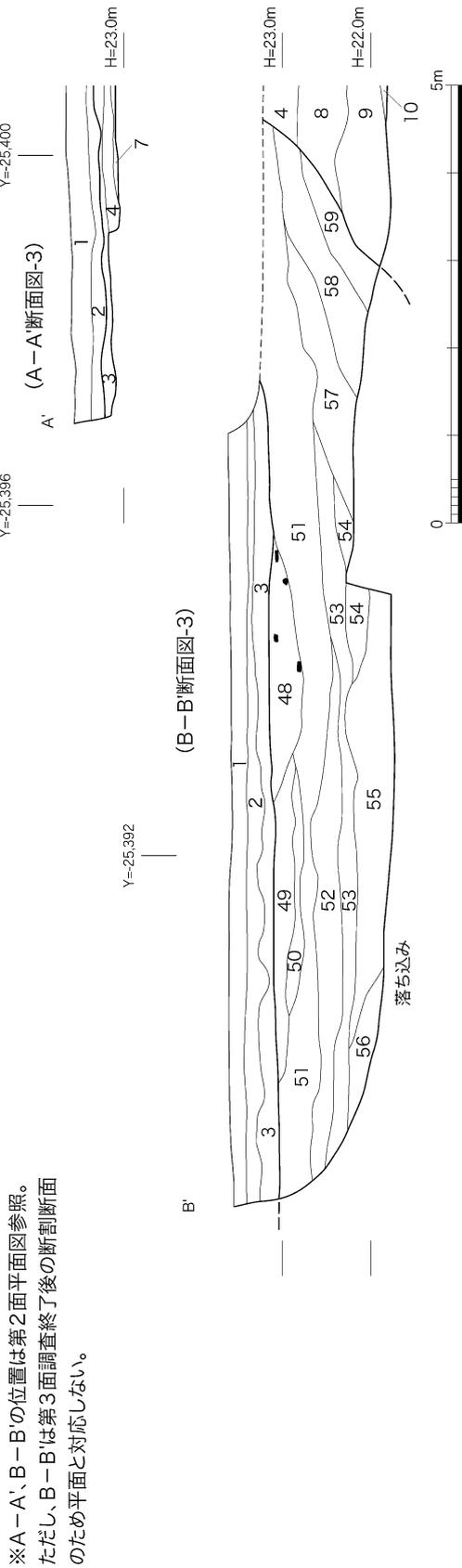


图5 断面图-1 (1:80)



※A-A'、B-B'の位置は第2面平面図参照。
 ただし、B-B'は第3面調査終了後の断割断面
 のため平面と対応しない。

図6 断面図-2 (1:80)

- | | | |
|----|---------------|--------------------------------|
| 1 | 2.5Y5/2暗灰黄色 | 小礫混極細～細砂(耕作土) |
| 2 | 2.5Y6/2灰黄色 | 小礫混極細～細砂 1～3cmの礫含(耕作床土) |
| 3 | 10YR5/6黄褐色 | 中～粗砂混シルト～極細砂 |
| 4 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | 粘質シルト～極細砂 |
| 5 | 10YR4/2灰黄褐色 | シルト～極細砂 炭化物少量混 |
| 6 | 10YR4/4褐色 | シルト～極細砂 炭化物少量混 |
| 7 | 10YR3/3暗褐色 | シルト 炭化物多量混 |
| 8 | 10YR3/3暗褐色 | 粘質シルト |
| 9 | 10YR3/3暗褐色 | 粘質シルト(8層と同じでやや粘質強い) 炭化物少量混 |
| 10 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | 砂質細～中砂 炭化物少量混 |
| 11 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | 粘質シルト(マンガン多い) |
| 12 | 10YR3/3暗褐色 | シルト～極細砂 やや粘質 炭化物少量混 |
| 13 | 10YR5/3にぶい黄褐色 | 粘質シルト～極細砂 やや粘質 |
| 14 | 10YR3/2黒褐色 | シルト～細砂 やや粘質 |
| 15 | 10YR4/2灰黄褐色 | 細砂混シルト～極細砂 |
| 16 | 10YR4/2暗灰黄色 | 粘質細砂混シルト |
| 17 | 2.5Y4/6オリーブ褐色 | 粘質シルト～細砂に2.5Y6/1黄灰色粘質シルトブロック混 |
| 18 | 2.5Y4/6オリーブ褐色 | 粗砂混粘質シルト～極細砂 0.5～1cmの礫含 |
| 19 | 10YR4/4褐色 | 粘質極細～中砂 0.5～1cmの礫多量含 |
| 20 | 10YR3/3暗褐色 | 細～粗砂 0.5～2cmの礫多量含 |
| 21 | 10YR5/3にぶい黄褐色 | 粘質シルト |
| 22 | 10YR4/2灰黄褐色 | 砂質極細～細砂 0.5～1cmの礫微量含 |
| 23 | 10YR5/3にぶい黄褐色 | 中砂混シルト～極細砂 焼土少量混 |
| 24 | 10YR5/2灰黄褐色 | シルト～極細砂 炭化物少量混 |
| 25 | 10YR4/2灰黄褐色 | 中～粗砂混シルト 炭化物やや多く混 |
| 26 | 10YR5/3にぶい黄褐色 | 粘質シルト(堅く締まる) |
| 27 | 2.5Y5/3黄褐色 | シルト(傾砂) |
| 28 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | シルト 炭化物やや多く混(柱穴30埋土) |
| 29 | 10YR3/4暗褐色 | 粘質シルト(柱穴30埋土) |
| 30 | 2.5Y5/1黄灰色 | 中～粗砂混シルト～極細砂 1～3cmの礫多量混(土壌3埋土) |
| 31 | 2.5Y5/4黄褐色 | 粘質シルト(土壌3埋土) |
| 32 | 10YR5/4にぶい黄褐色 | 粘質シルト(土壌3埋土) |
| 33 | 10YR5/2灰黄褐色 | シルト～極細砂(柱穴52埋土) |
| 34 | 10YR3/3暗褐色 | 炭化物少量混(柱穴52埋土) |
| 35 | 2.5Y4/1黄褐色 | シルト～極細砂 1～3cmの礫多量混 |
| 36 | 2.5Y5/2暗灰黄色 | 中～粗砂混シルト～極細砂(土壌16埋土) |
| 37 | 10YR5/2暗灰黄色 | 小礫混シルト～中砂(土壌16埋土) |
| 38 | 2.5Y4/2暗灰黄色 | 粘質シルトに粘質シルトブロック混(土壌16埋土) |
| 39 | 2.5Y5/1黄灰色 | 粗～極細砂混粘質シルト(土壌16埋土) |
| 40 | 10YR5/2暗灰黄色 | 中～粗砂混シルト～極細砂(柱穴73埋土) |
| 41 | 10YR5/3にぶい黄褐色 | シルト～極細砂 炭化物、焼土多量混(壁穴住居83埋土) |
| 42 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | 粘質シルト 焼土多量混(壁穴住居83露) |
| 43 | 10YR3/2黒褐色 | 粘質シルト 固く締まる(壁穴住居83露) |
| 44 | 10YR4/2灰黄褐色 | シルト～極細砂 焼土少量混 |
| 45 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | シルト～極細砂 やや粘質 炭化物少量混(壁穴住居201壁溝) |
| 46 | 10YR4/4褐色 | 粘質シルト～極細砂 炭化物少量混(柱穴205埋土) |
| 47 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | 粘質シルト 炭化物多量混 |
| 48 | 10YR5/3にぶい黄褐色 | 極細～中砂 やや粘質 5～10cmの礫少量含(須恵器多量) |
| 49 | 10YR3/3暗褐色 | シルト～極細砂 やや粘質 2～3cmの礫少量含 炭化物少量混 |
| 50 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | シルト～細砂 炭化物やや多く混(須恵器・土師器含) |
| 51 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | シルト～細砂 炭化物少量混(須恵器・土師器含) |
| 52 | 10YR4/2暗灰黄色 | 粘質シルト～極細砂 炭化物少量混(土師器含) |
| 53 | 10YR3/1黒褐色 | 粘質シルト 炭化物少量混(土師器含) |
| 54 | 2.5Y5/3黄褐色 | 粘質シルト 炭化物少量混 3～5cmの礫微量含(土師器含) |
| 55 | 7.5Y5/2灰オリーブ色 | 粘質粘土～シルト 一部グライ化(縄文土器少量含) |
| 56 | 2.5Y5/4黄褐色 | 粘質シルト～極細砂 炭化物微量混 |
| 57 | 10YR5/4にぶい黄褐色 | シルト～極細砂 やや粘質 炭化物微量混 |
| 58 | 10YR4/4褐色 | シルト～極細砂 |
| 59 | 10YR3/4暗褐色 | やや粘質 極細～細砂 |

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
古墳時代中期	竪穴住居201・241・242・243、土壙207・223	土壙207は竪穴住居201に伴う。 土壙223は竪穴住居243に伴う。
古墳時代後期	竪穴住居144・146・147・149・150、 土壙58・70、ピット74	
奈良時代	掘立柱建物170、竪穴住居83・145・148、 溝85・86・87・88・89	
平安時代	掘立柱建物5、柵6、柱穴29・52	
江戸時代	土壙1・2・3・4・16・125	

する。平安時代前期と18世紀代の遺構を検出したが、その間の遺構は皆無である。第2面の遺構は、古墳時代後期と奈良時代の遺構に大別できる。第3面の遺構は調査区西半でのみ検出した。残存状況から、本来は第2面の遺構とほぼ同一面で成立していたと考えられるが、後世の遺構による削平により、第2面より約30cm掘り下げたところで検出した。

(3) 第1面 平安時代・近世 (図7)

土壙1～4・16・125 調査区の中央付近で検出した。深さは約30～50cmで断面形は逆台形、もしくは楕円状を呈する。18世紀代と考えられる陶磁器片が微量出土した。内部に木枠などの痕跡は認められない。均質なシルト層を掘り抜いていることから、土取り穴か、耕作に関連するものと考えられる。

掘立柱建物5 (図8) 調査区の西端で検出した平安時代前期の建物跡である。身舎2間×3間

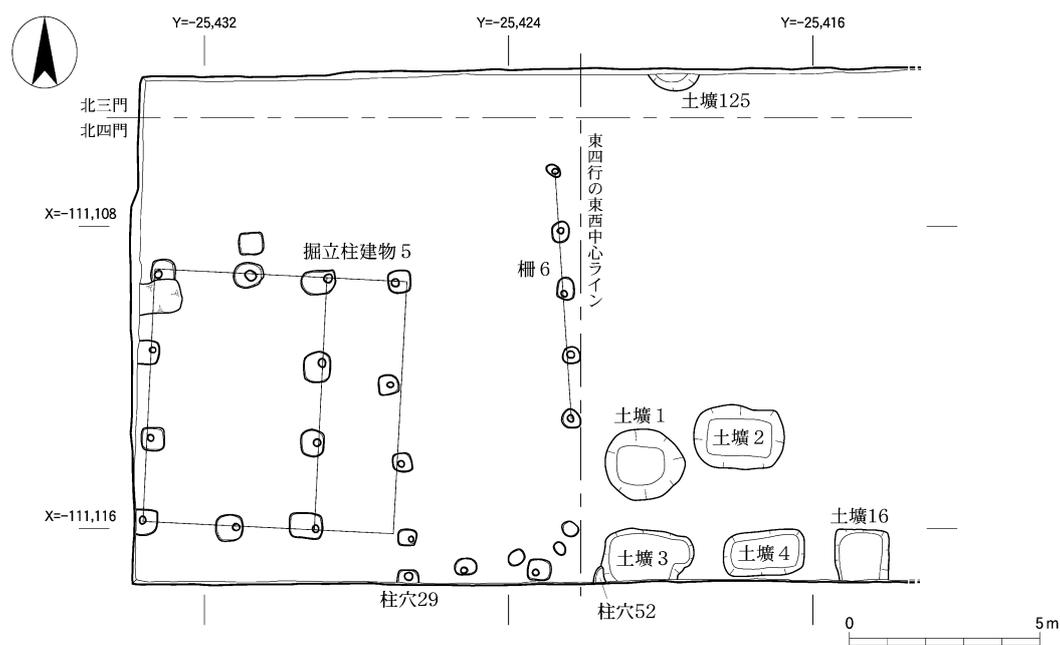


図7 第1面遺構平面図 (1:200)

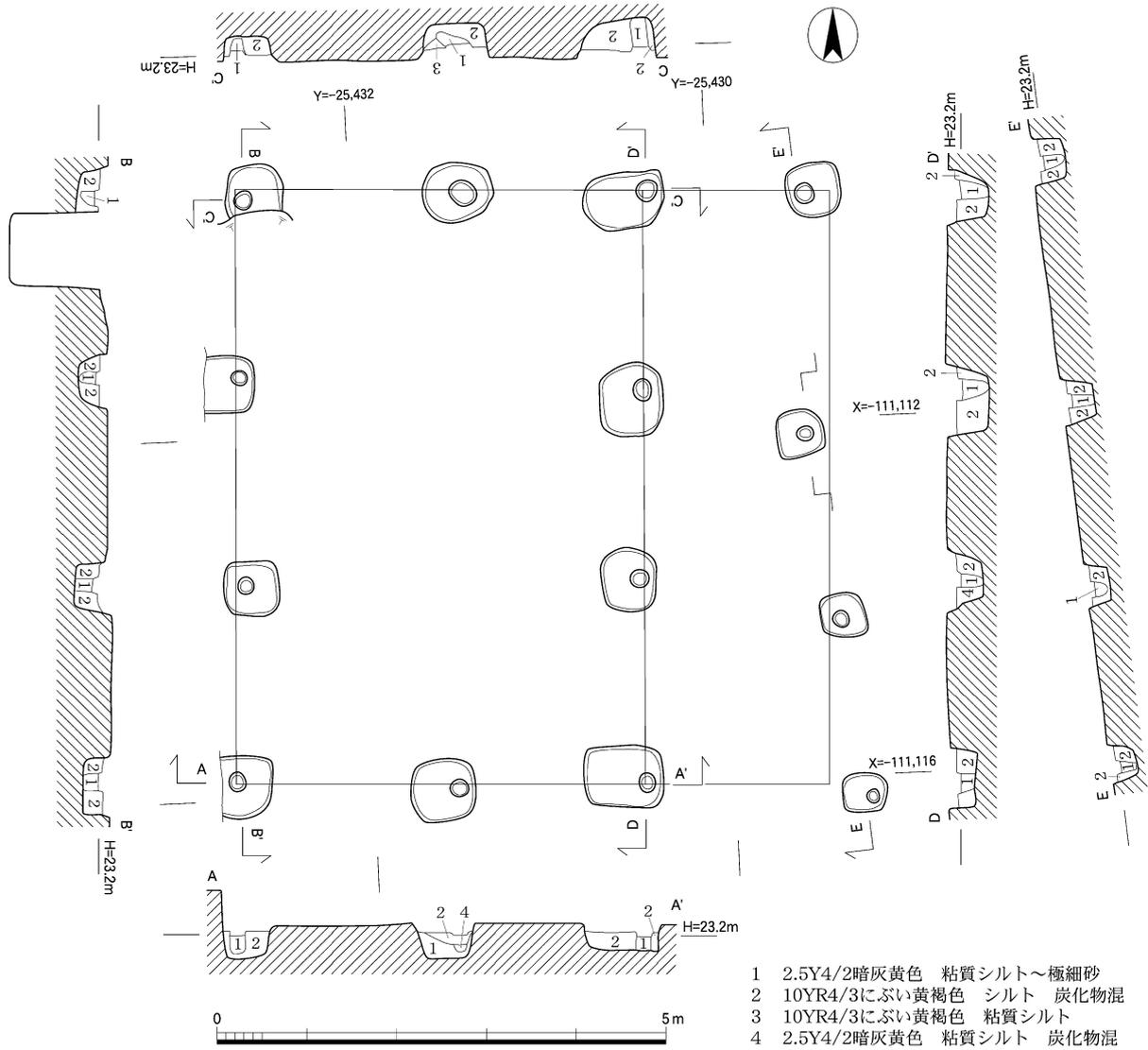


図8 掘立柱建物5実測図 (1 : 80)

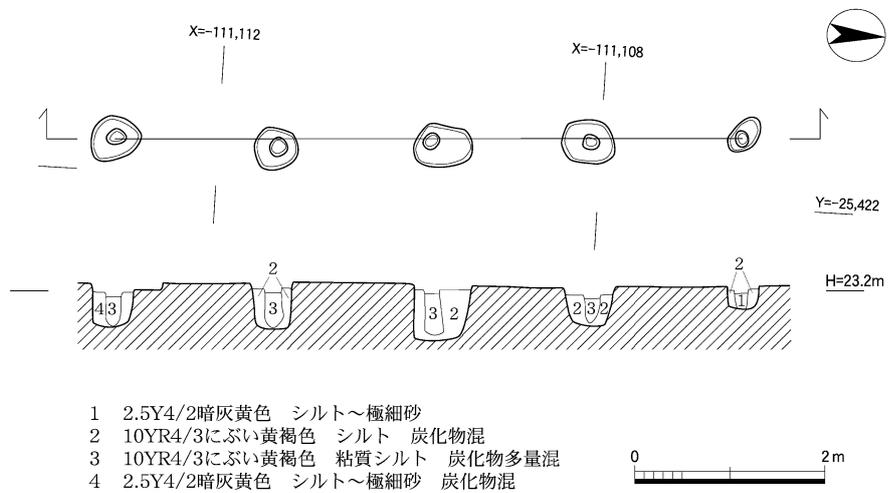


図9 柵6実測図 (1 : 80)

に東庇の付く南北棟建物で、方位は北に対して約3度東に振れる。身舎柱間は梁間、桁行ともに2.1m（7尺）の等間である。庇の出も同じく2.1m（7尺）である。身舎の柱穴は、掘形が一辺0.6～0.9mの方形、深さは0.4～0.5mで、柱痕跡から推測される柱径は0.15～0.2mである。庇の柱穴掘形は一辺0.5mの方形で、深さは0.3～0.4m、柱径は0.15mと推測される。

柵6（図9）掘立柱建物5から約4m東に位置する。出土遺物と位置関係から掘立柱建物5と同時期のものと考えられる。南北4間分を検出した。方位は北に対して約4度西に振れる。柱間は1.5m（5尺）の等間である。柱穴掘形は一辺約0.4mの方形または長径約0.4mの楕円形、深さは0.3～0.4mあり、柱径は0.15mと推測される。この柵6は、六条四坊八町の東四行の東西幅の中心ラインとほぼ一致する。また、これより東には平安時代の遺構は存在しない。

（4）第2面 古墳時代後期から奈良時代（図11）

第2面の遺構は、奈良時代と古墳時代後期の遺構に大別される。

奈良時代

竪穴住居145（図10）調査区中央やや西で検出した。ほぼ正方方位を向き、南北約4.2m×東西約4.1mの方形で、残存深は検出面から0.15mある。床面積は約17.2㎡で支柱穴や壁溝、竈は認められない。床面と壁に沿って炭化物を多量に含む層が堆積し、北東部分ではその炭化物層上面から廃絶後に投棄されたと考えられる8世紀後半頃の須恵器がまとまって出土した。

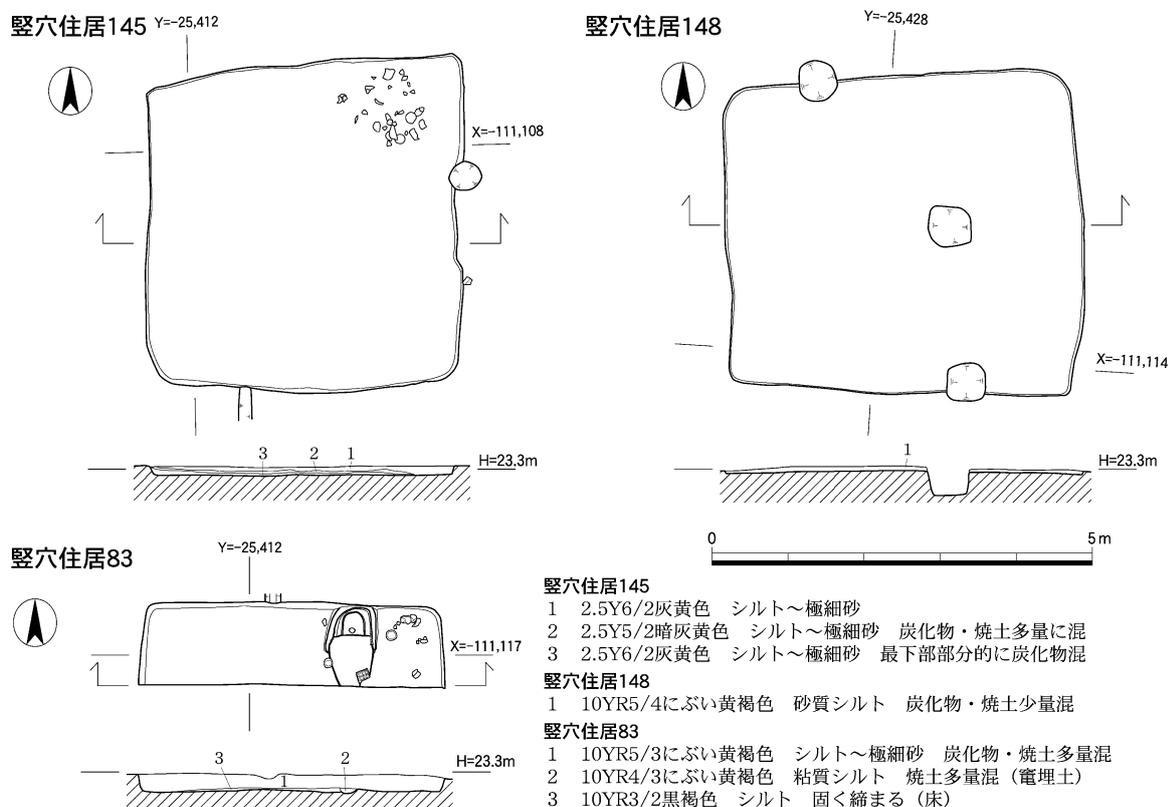


図10 奈良時代竪穴住居実測図（1：100）

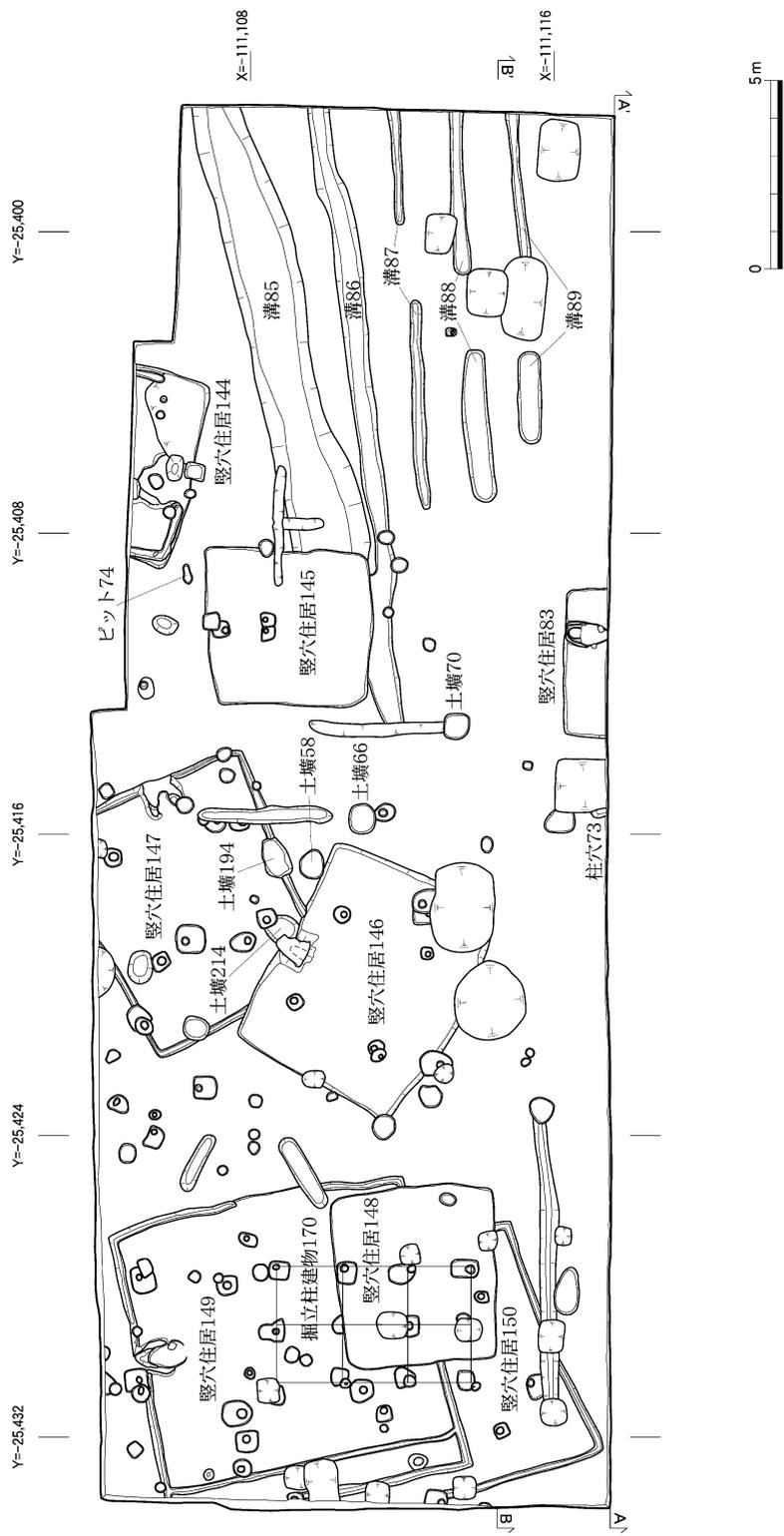
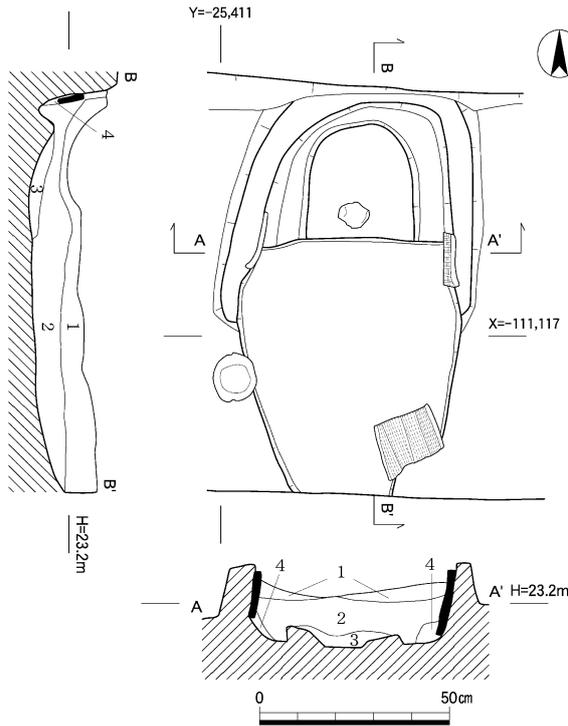


図 11 第2面遺構平面図 (1 : 200)

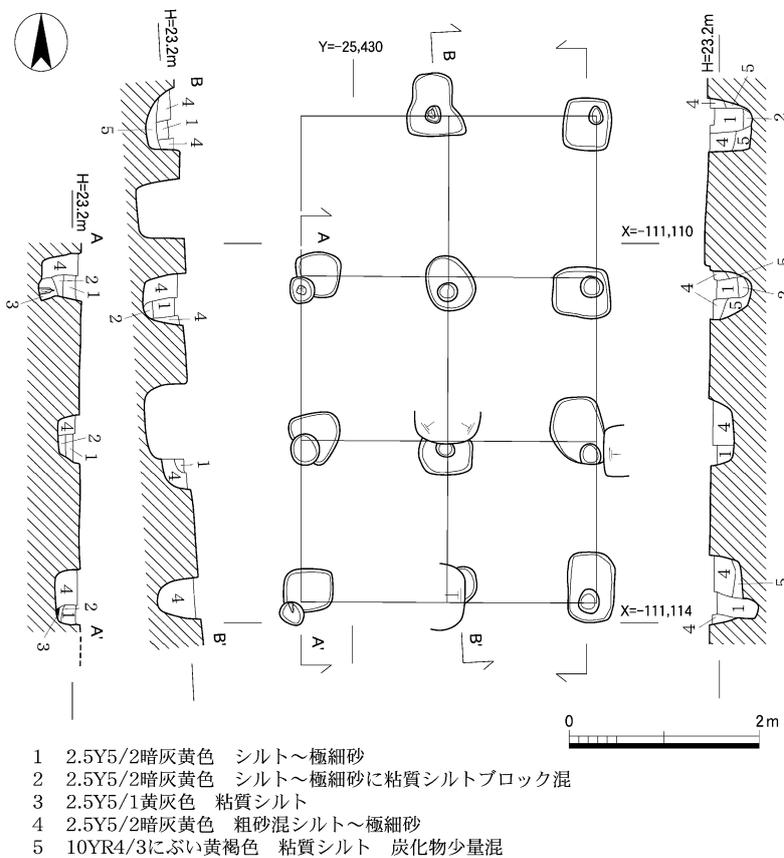


- 1 7.5YR4/3褐色 砂質シルト 焼土多量混
- 2 7.5YR2/2黒褐色 粘質シルト 炭化物・焼土多量混
- 3 7.5YR4/4褐色 粘質粘土～シルト 焼け締まる
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色 粘質シルト 固く締まる

図 12 竪穴住居 83 竈実測図 (1 : 20)

竪穴住居 148 (図 10) 調査区西側で検出した。正方位を向く。東壁が西壁より長くやや歪な方形を呈し、南北約 4.2 m × 東西約 4.7 m で、残存深は検出面から 0.05 m ある。床面積は約 19.7 m²。支柱穴、壁溝、竈は認められない。

竪穴住居 83 (図 10・12) 調査区中央やや西、竪穴住居 145 の南で検出した。ほぼ正方位を向く。南側は調査区外へ延びるが、一辺約 4 m の方形と推測される。残存深は検出面から約 0.2 m ある。支柱穴や壁溝は認められない。床面や埋土からは 8 世紀前半頃に位置づけられる土器が出土した。北壁東寄りに馬蹄形の竈が取り付く。この竈より西側の床面は固く締まる。馬蹄形の竈は、内壁にの凸面に格子目タタキを施した白鳳期の平瓦を分割したものを凸面が内側を向くように立て、さらにその内側に幅約 0.1 m、深さ約 0.05 m の馬蹄形の溝がめぐる。移動式竈を内側の溝に据え付け、瓦はそれを固定するためのものである可能性がある。竈の上部は削平されていたが、燃焼部は焼け締まり、鉄製の刀子と土師器の甕が出土した。竈廃絶時の祭祀の可能性が考えられる。焚口部は床面より一段掘り下げられている。



- 1 2.5Y5/2暗灰黄色 シルト～極細砂
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色 シルト～極細砂に粘質シルトブロック混
- 3 2.5Y5/1黄灰色 粘質シルト
- 4 2.5Y5/2暗灰黄色 粗砂混シルト～極細砂
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色 粘質シルト 炭化物少量混

図 13 掘立柱建物 170 実測図 (1 : 80)

掘立柱建物 170 (図 13) 調査区西側で検出

した。竪穴住居 148 に削平される。梁間 2 間×桁行 3 間の南北棟の総柱建物である。正方方位を向く。柱間は梁間が 1.7 m の等間、桁行が 1.6 m の等間である。柱穴は、掘形が一辺 0.4 ～ 0.5 m の方形もしくは楕円形に近い形で、深さは 0.3 ～ 0.4 m。柱痕跡から推測される柱径は 0.2 ～ 0.25 m ある。柱掘形より柱が沈み込むものや、西側柱筋では柱根が残存しているものが認められた。

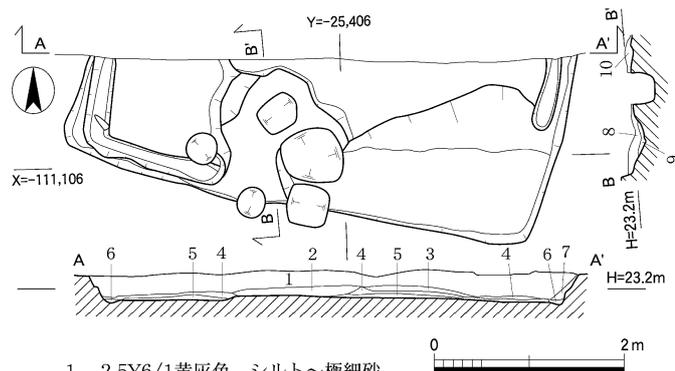
溝 85 ～ 89 (図 11) 調査区東側で検出した東西方向の溝群である。底は西から東に傾斜し、方位は、東側では北にやや振れる。溝 85・86 は Y=-25,409 ラインで分岐する。深さは 0.1 ～ 0.15 m で、埋土は 10YR5/2 灰黄褐色シルト～10YR5/3 にぶい黄褐色シルト、炭化物を少量含む。底から 7 世紀半ば～後半の須恵器が出土し、8 世紀半ば頃と考えられる竪穴住居 145 に削平されることから、8 世紀前半～半ば頃には埋没した溝と考えられる。上層からは 8 世紀後半の土器が出土したが、これはこの溝群が断割調査で確認した後背湿地と考えられる落ち込みの縁辺に位置し、后背湿地は一般的に地下水位が高く、地盤沈下を起こしやすいため、溝の埋没後に沈下してできた窪地に混入したものと考えられる。溝 87 ～ 89 はいずれも深さ 0.1 m 未満で埋土は 10YR5/2 灰黄褐色シルトの単層である。

古墳時代

竪穴住居 144 (図 14) 調査区北東で住居の南半部を検出した。方形で、南壁の長さは約 5 m、残存深は約 0.25 m である。方位は北に対して約 20 度東に振れる。南壁中央に竈が取り付くが、奈良時代の土壌やピットと重複し、原形をとどめない。壁溝は断面 U 字形で幅 0.2 m、深さは 0.15 m ある。

竪穴住居 146 (図 15) 調査区の中央で検出した。一辺 6 m × 5 m の長方形、深さは検出面から 0.5 m ある。床面積は約 30 m²。方位は北に対して約 28 度東に振る。主柱穴は 4 基で、掘形は一辺 0.3 ～ 0.4 m の方形と直径 0.4 m の円形のものがある。深さは 0.3 ～ 0.5 m、柱径は約 0.15 m と推測される。壁溝は認められなかった。北壁中央に馬蹄形の竈が取り付く。上部は削平されていたが、赤く焼け締まった竈の袖の一部と袖を支えるためと考えられる土器が両袖に残存していた。

竪穴住居 147 (図 16・20) 調査区中央で検出した。竪穴住居 146 に削平される。一辺 5.4 m × 6.8 m の長方形で、残存深は 0.1 m、床面積は約 36.7 m²。方位は北に対して約 60 度東に振る。主柱穴は 4 基で、掘形は一辺約 0.4 m の方形、深さは 0.4 ～ 0.6 m ある。壁溝は断面 U 字形で幅 0.2 m、



- 1 2.5Y6/1黄灰色 シルト～極細砂
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト
- 3 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物少量混
- 4 10YR4/2灰黄褐色 シルト 炭化物・焼土多量混
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色 粘質シルト 固く締まる
- 6 10YR4/4褐色 シルト 炭化物・焼土少量混
- 7 7.5YR4/3褐色 シルト 炭化物・焼土多量混
- 8 5YR5/6明赤褐色 シルト 焼土多量混
- 9 10YR5/2灰黄褐色 粘質シルト 炭化物多量混
- 10 2層と同じ

図 14 竪穴住居 144 実測図 (1 : 80)

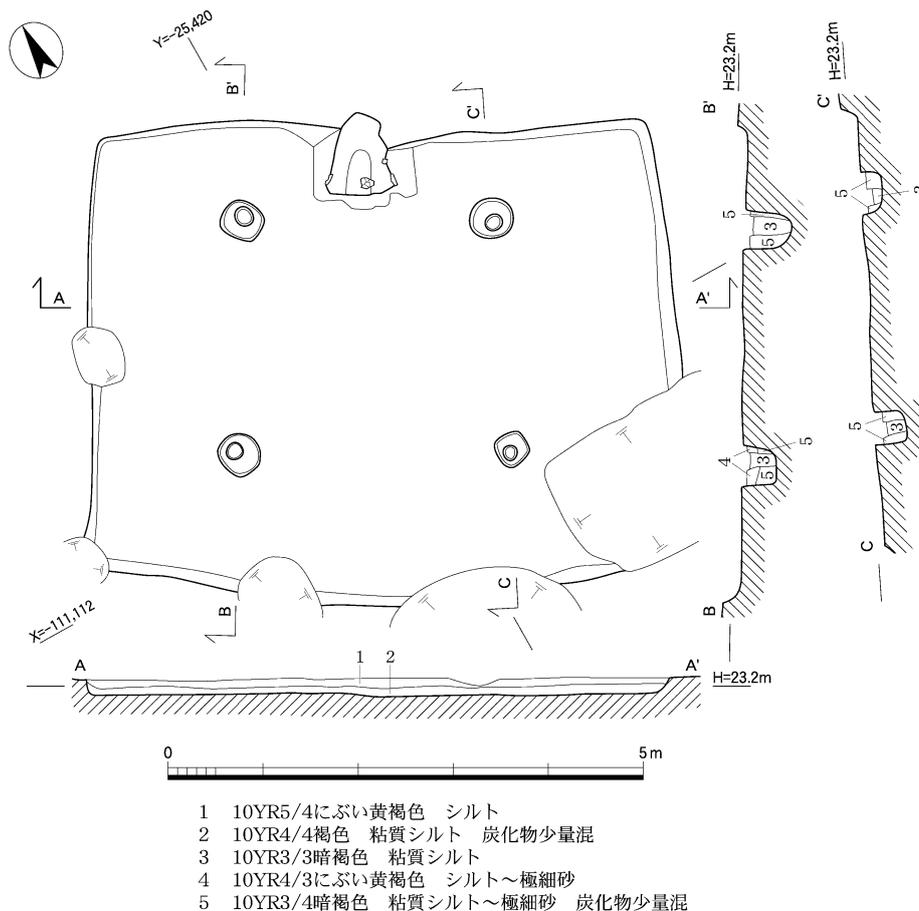


図 15 竪穴住居 146 実測図 (1 : 80)

深さは 0.1 m。床面直上から土師器と須恵器が出土した。須恵器は MT15 ~ TK10 型式のもの⁹⁾である。また支柱穴の掘形と床面から 1 点ずつ計 2 点の滑石製白玉が出土した。南壁の中央付近では土壌 194 を検出した。出土した須恵器の年代が住居の床面出土須恵器とほぼ同じであることから、この住居に伴う土壌と考えられる。東壁の中央やや南寄りに馬蹄形の竈が取り付く。燃烧部には甕を支えるための支柱石と考えられる焼けた石が残存していた。また、燃烧部からは、外面磨き調整で内面にヘラ状工具で掻き取ったような調整を施した土器が出土している。煙出し部は認められなかった。

竪穴住居 149(図 17・18・20) 調査区西端で検出した。西側へ一度拡張する。拡張前は一辺約 7.4 m × 8.0 m、床面積は約 59.2 m²。拡張後は一辺約 8.2 m × 8.0 m、床面積は約 65.6 m²。深さはともに検出面から 0.2 m ある。方位は北に対して約 10 度西に振る。支柱穴は 4 基で、拡張後は西側の 2 基の柱穴の掘り直しを行っている。掘形は一辺 0.4 ~ 0.6 m の方形で、深さは 0.3 ~ 0.4 m。この支柱穴に囲まれた範囲は、床面が固く締まる。壁溝は断面 U 字形で幅 0.2 m、深さ 0.1 m。東壁面の中央約 2 m は壁溝が途切れる。入り口部の可能性がある。壁溝からは、3 箇所から外面タタキ目で砲弾形の製塩土器が出土した。竈の西側で出土したものはほぼ完形で、横倒しの状態で出土した。住居の南端では、床面直上からほぼ完形の須恵器高杯が 3 個体出土している。時期は TK47 ~ MT15 型式のものである。北壁ほぼ中央に馬蹄形の竈が取り付く。燃烧部から MT15

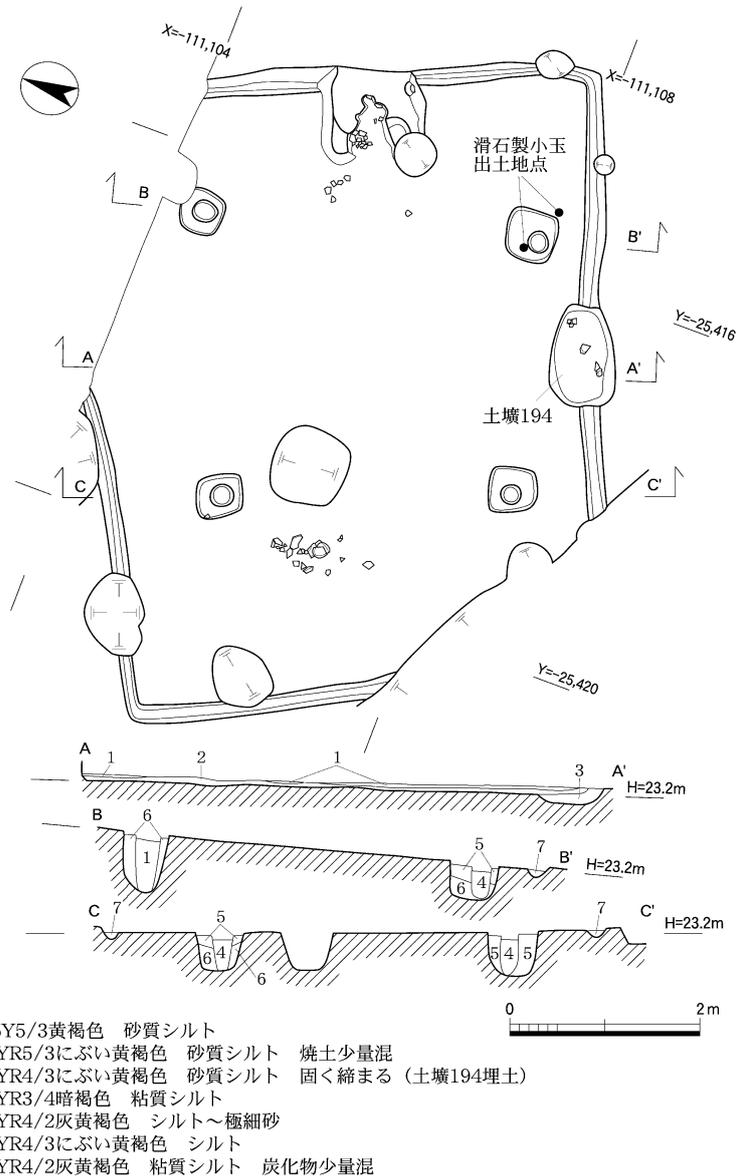


図 16 竪穴住居 147 実測図 (1 : 80)

型式の須恵器杯身が出土した。煙出は検出していない。

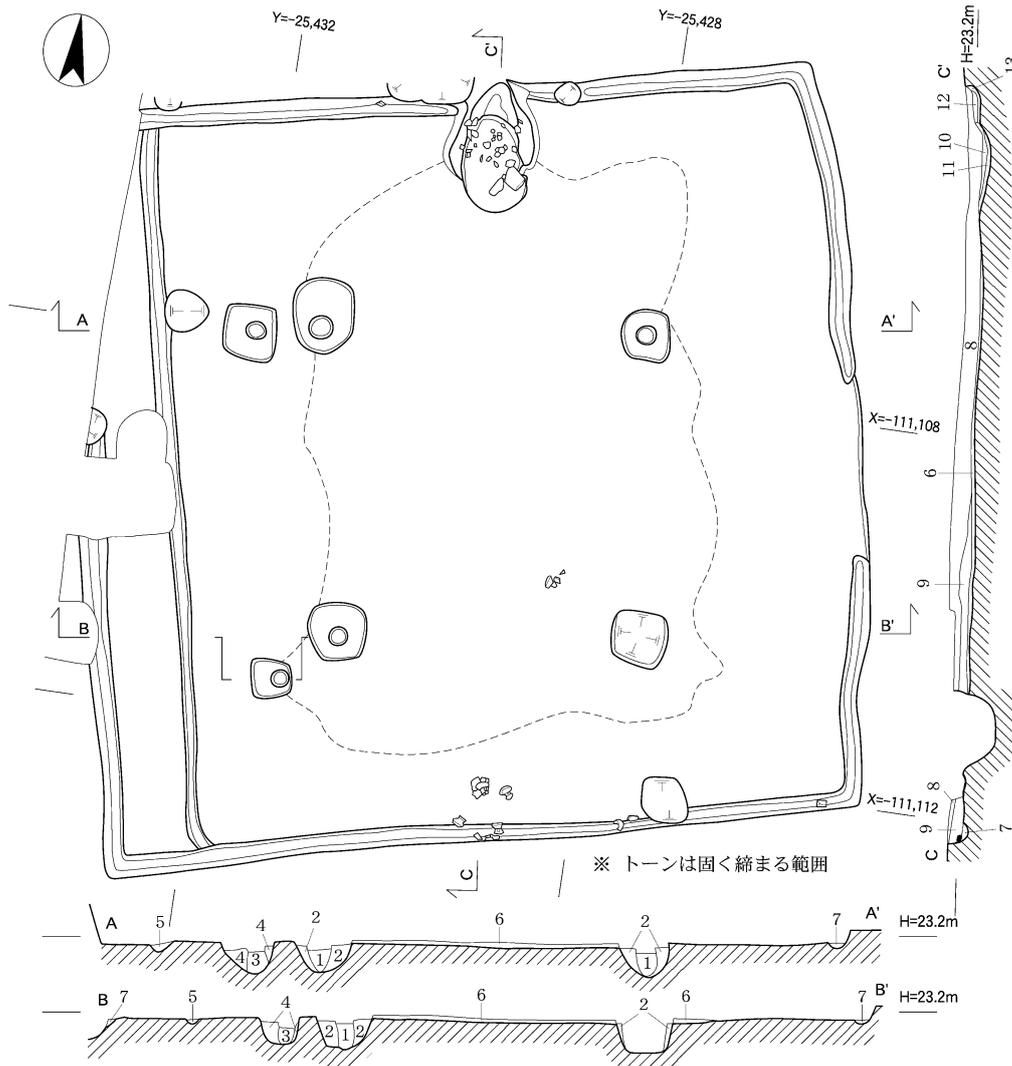
竪穴住居 150 (図 19) 調査区南東で検出した。北半は竪穴住居 148・149 に削平される。壁溝と支柱穴のみ検出した。方位は北に対して約 20 度西に振る。南辺の長さは約 6.6 m である。壁溝は断面 U 字形で、深さは 0.1 m。支柱穴は一辺 0.4 m の方形で、深さは 0.2 ~ 0.3 m ある。

土壇 58 (図 21) 竪穴住居 146 と 147 の間で検出した。平面形は、長径 0.75 m × 短径 0.6 m の楕円形、深さは約 0.4 m ある。断面形は播鉢状を呈する。土師器甕が出土した。

土壇 70 (図 21) 調査区中央で検出した。平面形は直径 0.7 m の円形、深さは 0.2 m ある。MT15 型式の完形の須恵器杯、土師器の把手付甕・甕・碗、砥石などがまとまって出土した。

土壇 214 (図 21) 竪穴住居 147 の支柱穴に削平を受ける。平面形は直径 0.8 m の円形、深さは 0.4 m ある。底から MT15 型式の完形の須恵器杯蓋が出土した。

ピット 74 (図 11) 竪穴住居 144 の南で検出した。長径 0.4 × 短径 0.2 m の楕円形のピットで、



- ※ トーンは固く締まる範囲
- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| 1 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト 炭化物少量混 | 9 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト～極細砂 炭化物少量混 |
| 2 10YR5/3にぶい黄褐色シルト～極細砂 | 10 10YR4/1褐灰色粘質粘土～シルト 炭化物・焼土多量混 |
| 3 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト 炭化物多量混 | 11 5YR4/4にぶい赤褐色シルト 焼土多量混 固く焼け締まる |
| 4 10YR4/4褐色シルト～極細砂 焼土少量混 | 12 5YR4/3にぶい赤褐色シルト 焼土多量混 |
| 5 2.5Y6/1黄灰色中砂混粘質シルト～極細砂 | 13 7.5YR4/1褐灰色シルト やや粘質 炭化物少量混 |
| 6 10YR4/2灰黄褐色シルト 非常に固く締まる | |
| 7 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 炭化物少量混 | |
| 8 10YR5/2灰黄褐色シルト～極細砂 炭化物・焼土少量混 | |

図 17 竪穴住居 149 実測図 (1 : 80)

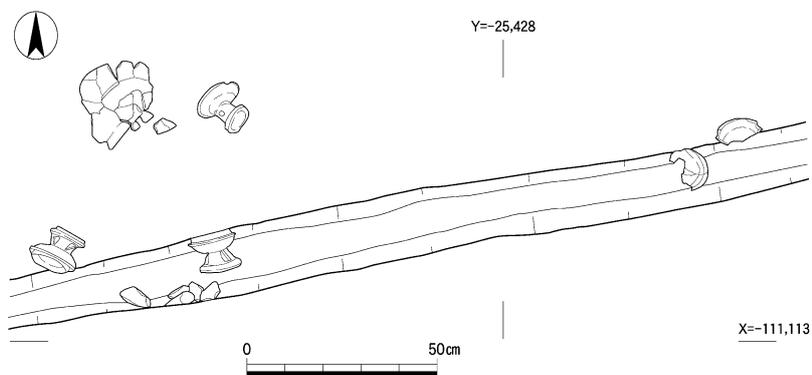


図 18 竪穴住居 149 床面土器出土状況 (1 : 20)

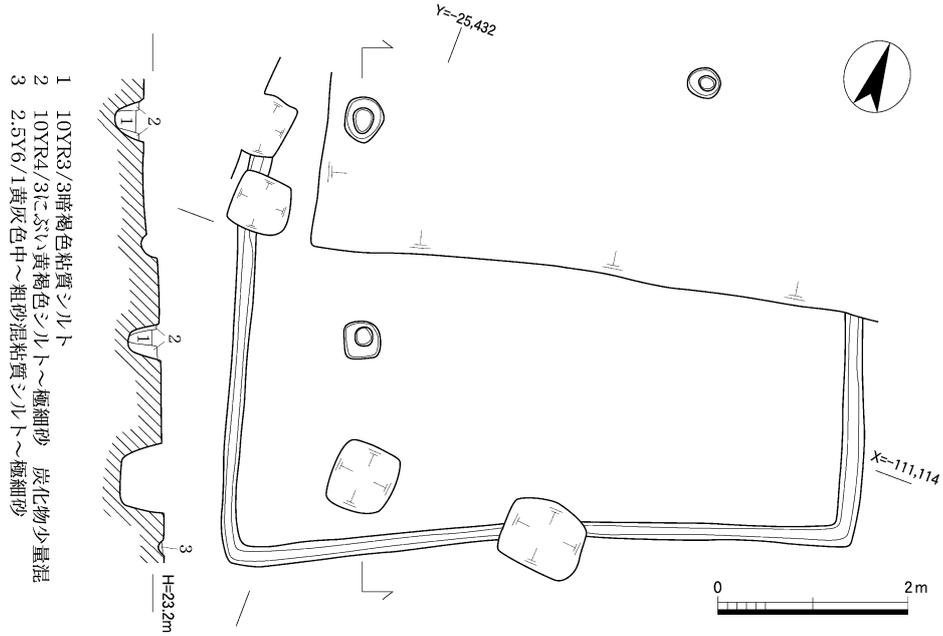
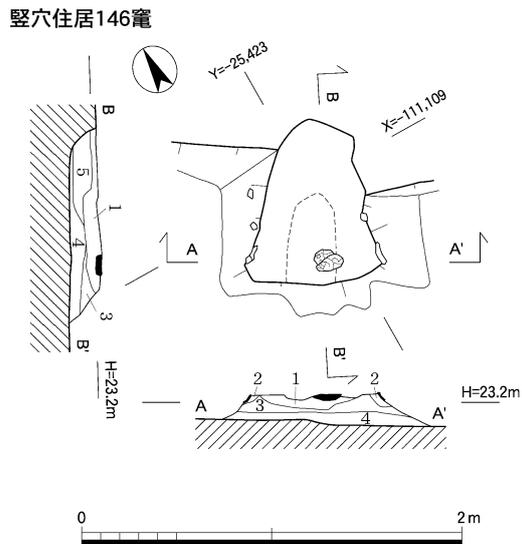
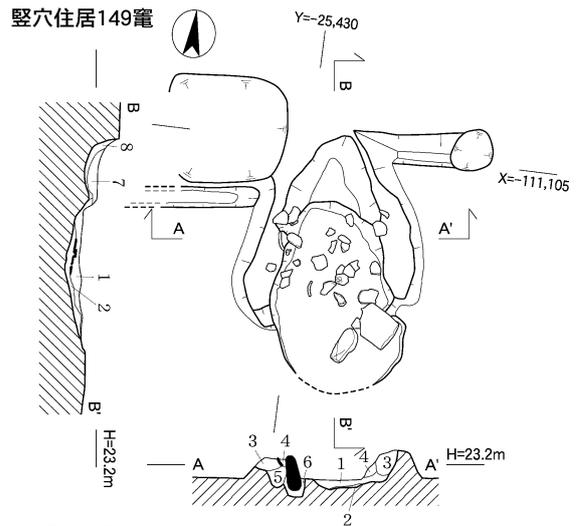
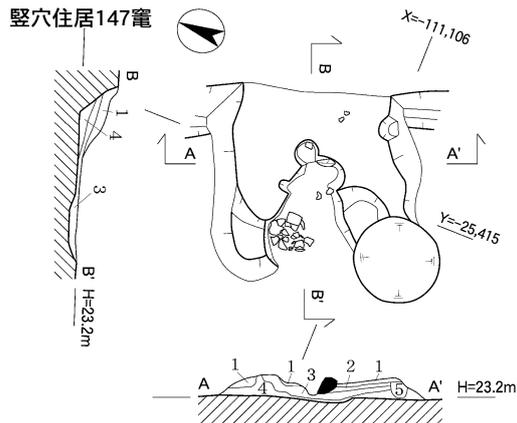


図19 竪穴住居150実測図(1:80)



竪穴住居147竈

- 1 7.5YR4/2灰褐色シルト 炭化物・焼土多量混 焼け締まる
- 2 10YR6/2灰黄褐色シルト
- 3 7.5YR4/3褐色シルト 炭化物・焼土多量混 炉壁塊含
- 4 10YR5/3にぶい黄褐色シルト〜極細砂
- 5 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘土ブロック・焼土少量含

竪穴住居149竈

- 1 10YR4/1褐灰色粘質粘土〜シルト 炭化物・焼土多量混
- 2 5YR4/4にぶい赤褐色シルト 焼土多量混 焼け締まる
- 3 7.5YR4/3褐色シルト 焼土多量混
- 4 7.5YR5/3にぶい褐色シルト〜極細砂 焼土混
- 5 7.5YR5/3にぶい褐色粘質粘土〜シルト 炭化物・焼土少量含
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト
- 7 5YR4/3にぶい赤褐色シルト 焼土多量混
- 8 7.5YR4/1褐灰色シルト やや粘質 炭化物混

竪穴住居146竈

- 1 5YR4/6赤褐色シルト 炭化物・焼土多量混 焼け締まる
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色シルト 焼土少量混
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
- 4 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
- 5 7.5YR4/3褐色シルト やや粘質 炭化物・焼土多量混

図20 古墳時代後期竪穴住居竈実測図(1:40)

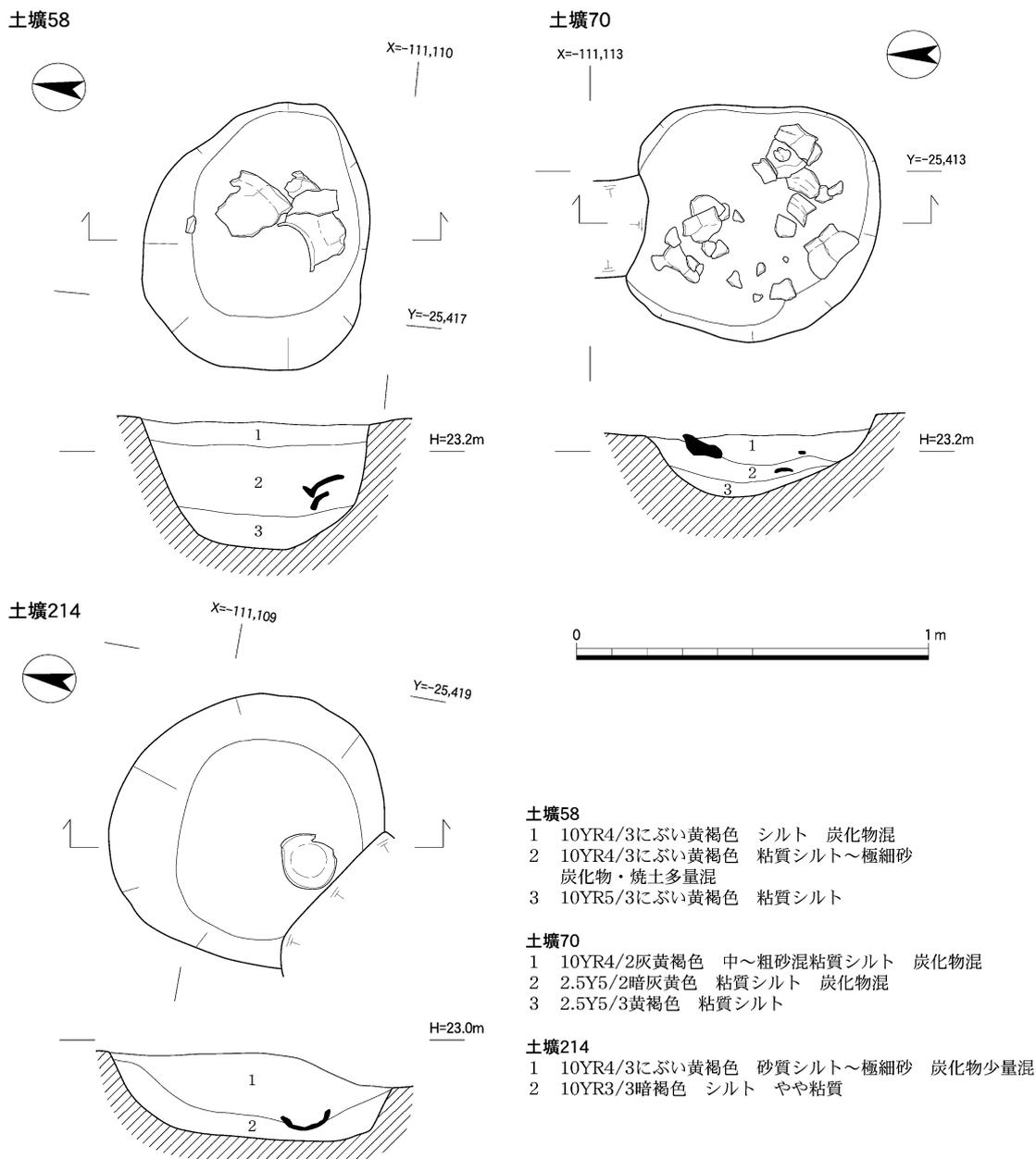


図 21 土壌 58・70・214 実測図 (1:20)

深さは約 0.6 m ある。埋土から土錘が出土した。

(5) 第 3 面 古墳時代中期 (図 22)

調査区西半で、古墳時代中期と考えられる竪穴住居を 4 棟検出した。いずれも壁溝と主柱穴が残存していた。竈は検出していない。

竪穴住居 243 (図 24) 調査区中央北側で検出した。一辺約 5.3 m × 4.9 m の方形で、方位は北に対して約 40 度西に振る。調査区内では 3 基の主柱穴を検出した。直径 0.4 m の円形で深さは 0.2 m。壁溝は断面 U 字形で検出面からの深さは 0.1 m ある。住居内部で土壌 223 を検出した。直径約 0.6 m の円形で、深さは約 0.25 m ある。遺物が乏しく住居に伴うものかは不明である。

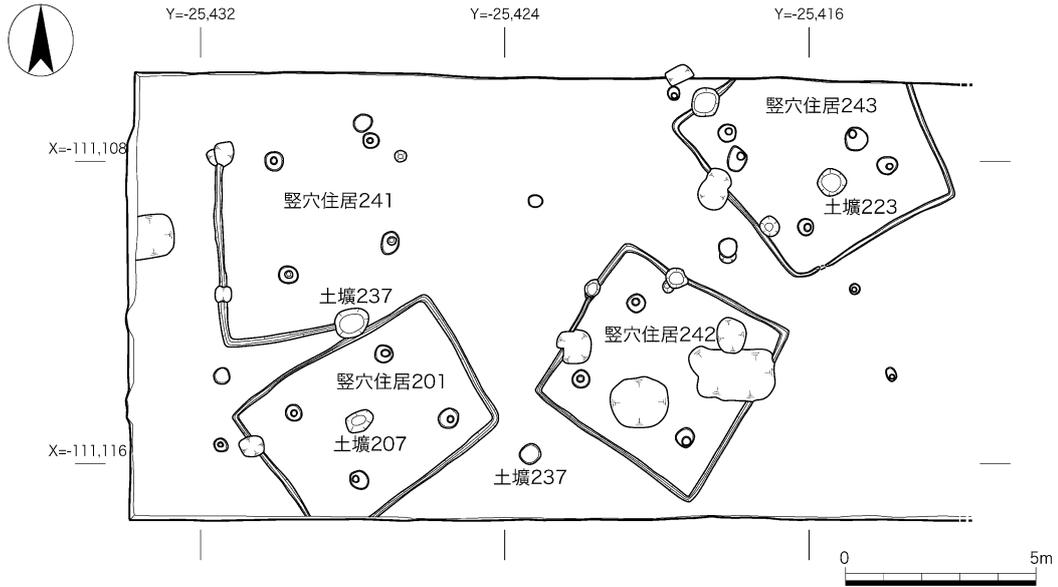


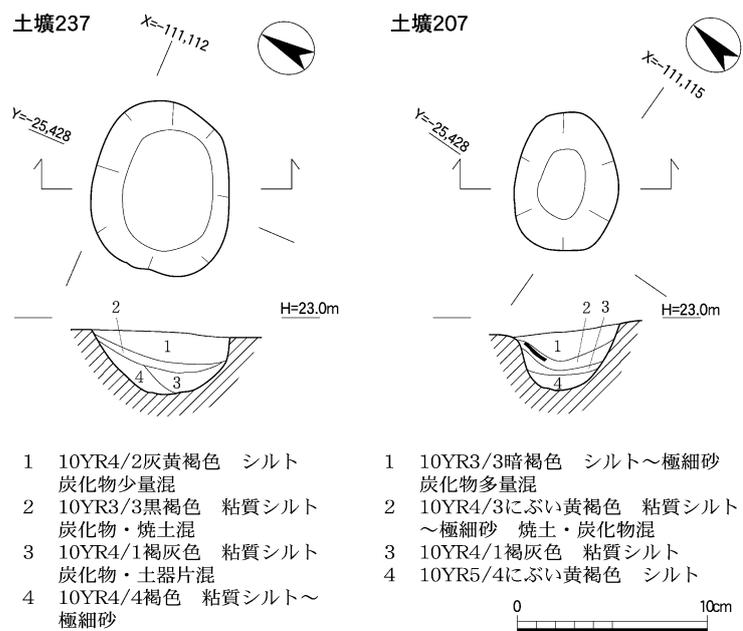
図 22 第 3 面遺構平面図 (1 : 200)

竪穴住居 242 (図 24) 竪穴住居 243 の南で検出した。やや歪むが、一辺約 5 m の正方形で、床面積は約 25 m² である。方位は北に対して約 30 度東に振れる。主柱穴は 3 基確認した。直径約 0.5 m の円形で深さは 0.3 m ある。壁溝は断面 U 字形、検出面からの深さは 0.05 m。

竪穴住居 201 (図 24) 竪穴住居 242 の西に隣接する。一辺約 6.0 m × 4.4 m の長方形で、床面積は約 26.5 m²。方位は北に対して約 30 度西に振れる。主柱穴は 4 基で、直径約 0.5 m の円形、深さは 0.3 m ある。壁溝は断面 U 字形で、検出面からの深さは 0.05 m。中央で土壌 207 を検出した (図 23)。長径 0.7 m × 短径 0.5 m の楕円形で、深さは 0.2 m ある。埋土から須恵器破片、土師器の甕が出土した。5 世紀後半頃のものと考えられ、住居に伴う遺構の可能性がある。

竪穴住居 241 (図 24) 竪穴住居 201 に削平される。南辺と西辺の壁溝の一部と主柱穴 4 基を検出した。壁溝は最も残りの良い箇所で検出面からの深さ 0.05 m。主柱穴は直径約 0.5 m の円形で残存深は 0.3 m ある。

土壌 237 (図 23) 竪穴住居 242 と 201 の間で検出した。両住居を削平する。長径 0.8 m × 短径 0.7 m の楕円形で、深さは

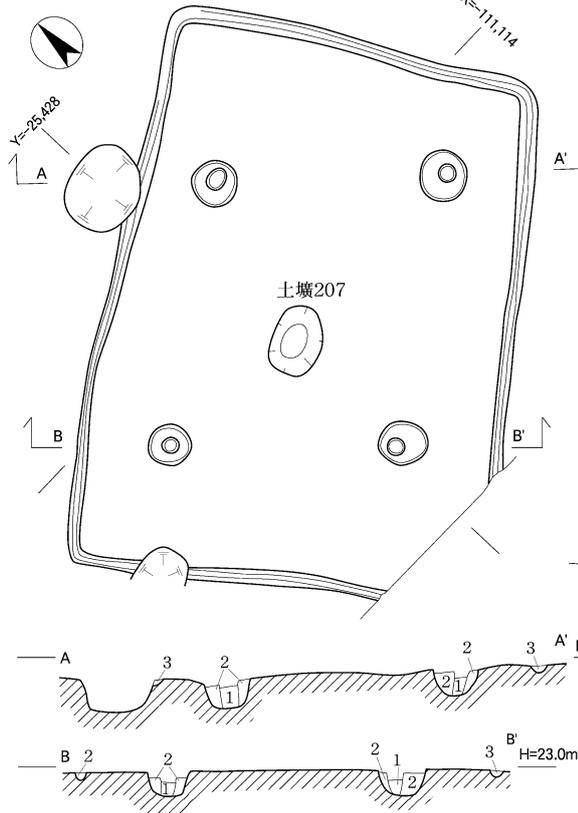


- | | |
|--|---|
| <p>1 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
炭化物少量混</p> <p>2 10YR3/3 黒褐色 粘質シルト
炭化物・焼土混</p> <p>3 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト
炭化物・土器片混</p> <p>4 10YR4/4 褐色 粘質シルト～
極細砂</p> | <p>1 10YR3/3 暗褐色 シルト～極細砂
炭化物多量混</p> <p>2 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質シルト
～極細砂 焼土・炭化物混</p> <p>3 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト</p> <p>4 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト</p> |
|--|---|

図 23 土壌 207・237 実測図 (1 : 40)

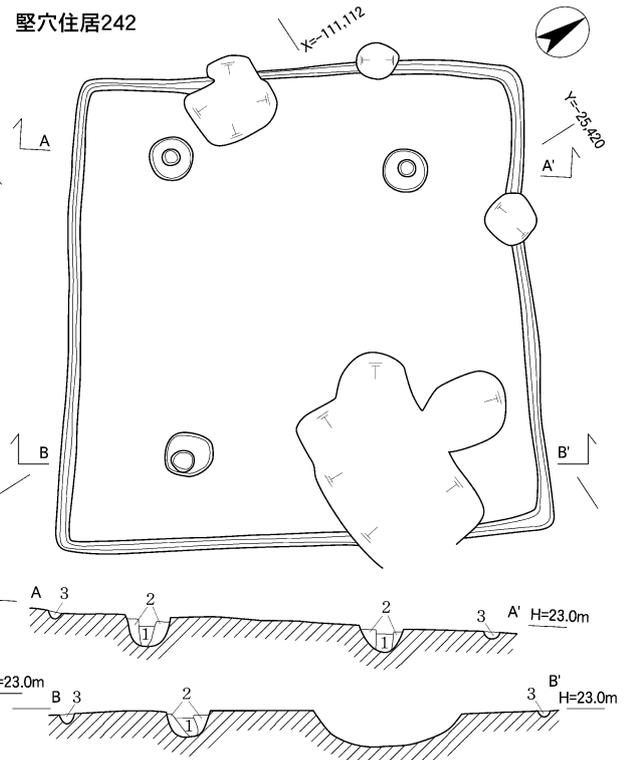
0.6 m ある。断面は播鉢状を呈する。埋土から須恵器・土師器の破片が出土した。

堅穴住居201



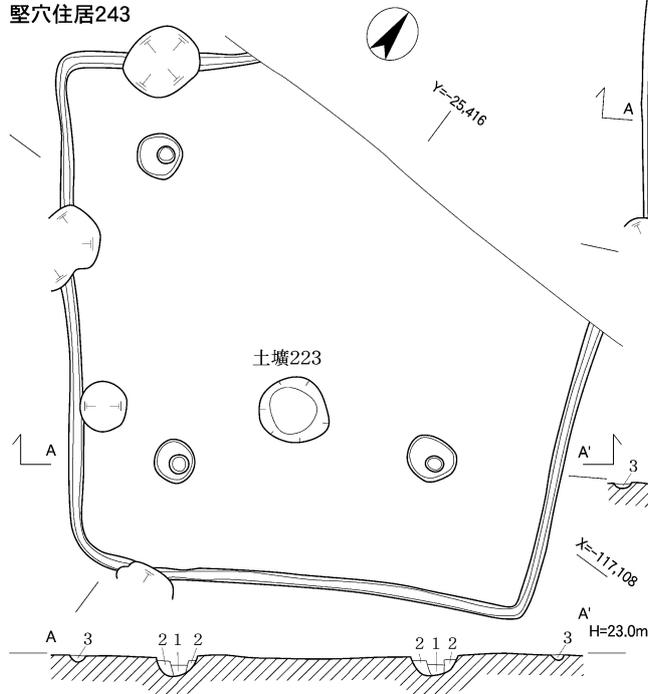
- 1 10YR3/3暗褐色シルト〜極細砂 やや粘質 炭化物混
- 2 10YR3/4暗褐色シルト
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト〜極細砂

堅穴住居242



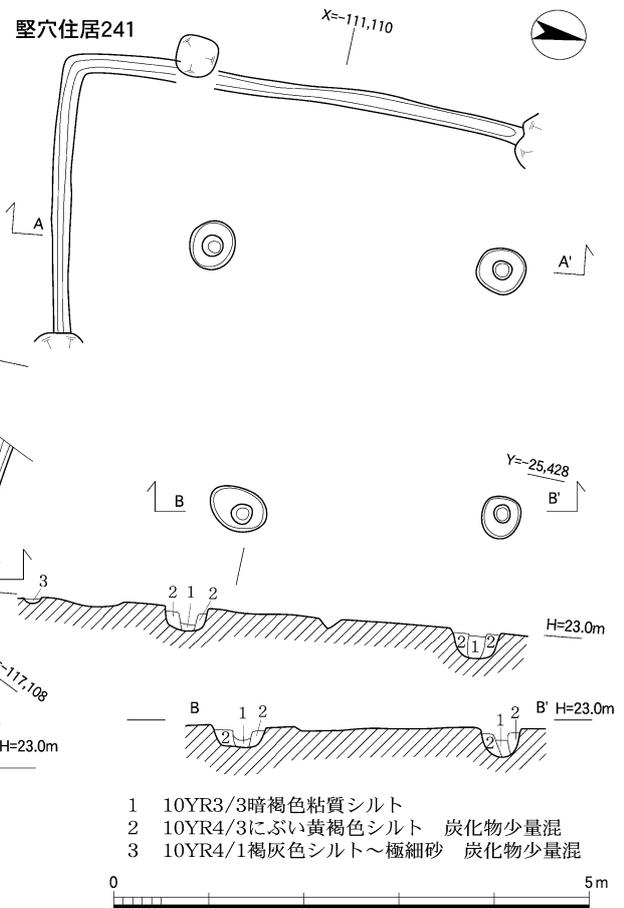
- 1 10YR4/4褐色粘質シルト 炭化物少量混
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト〜極細砂

堅穴住居243



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト 炭化物少量混
- 2 10YR4/4褐色シルト
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト〜極細砂

堅穴住居241



- 1 10YR3/3暗褐色粘質シルト
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 炭化物少量混
- 3 10YR4/1褐色灰色シルト〜極細砂 炭化物少量混

図24 古墳時代中期堅穴住居実測図 (1 : 80)

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

遺物は、整理箱にして25箱出土した。時代は縄文時代から近世のものが出土している。そのうち古墳時代後期と奈良時代の遺物が約9割を占める。近世のものは7点あるが、いずれも小片で図化はできなかった。時期は18世紀代と考えられる。種類別の比率は土器が9割を占め、その他瓦、石製品、金属製品が出土している。以下に各時期に分けてまとめる。なお、掲載遺物の詳細については表3の遺物一覧表に記載した。

(2) 平安時代の遺物 (図25)

掘立柱建物5、柵6から土師器高杯・皿、須恵器壺・杯の破片が出土したが、小片で磨滅が著しく、図化できたのは2点である。いずれも掘立柱建物5の柱穴掘形から出土したものである。1は土師器皿Aで、磨滅が著しく調整は不明。口縁端部は内側に肥厚する。2は須恵器壺Eである。肩が強く張る。焼成は堅緻で、胎土は精良。これらは9世紀初頭の所産と考えられる。その他、江戸時代の土壌に混入して平安時代の緑釉陶器や須恵器が少量認められたが、小片のため時期や器形は

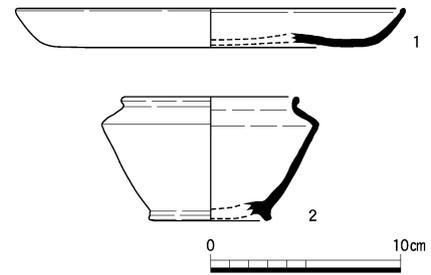


図25 平安時代土器実測図(1:4)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器	1箱	縄文土器3点	1箱	0箱
	石製品		石鏃1点、石皿1点、砥石1点		
弥生時代	弥生土器		弥生土器1点		
	石製品		石斧1点		
古墳時代	土師器、須恵器、土製品	20箱	土師器9点、製塩土器1点、須恵器22点、土錘1点	16箱	0箱
	石製品		石錘1点、滑石製小玉2点、砥石1点		
奈良時代	土師器、須恵器	8箱	土師器2点、製塩土器2点、須恵器38点	6箱	0箱
	平瓦		平瓦6点		
	金属製品		鉄製刀子1点		
平安時代	土師器、須恵器	2箱	土師器1点、須恵器1点	1箱	1箱
近世	焼締陶器、施釉陶器、磁器				
合計		31箱	96点(6箱)	24箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より6箱多くなっている。

不明であった。

(3) 奈良時代の遺物

落ち込み最上層(図26) 後背湿地と考えられる落ち込みの最上層からは、須恵器が多量出土したが、大半が破片資料であり、図化できたのは3点である。いずれも8世紀後葉の所産と考えられる。3・4は杯蓋である¹⁰⁾。3は口縁部の屈曲が強く、口縁端部は下方に突出し丸くおさめる。4は、口縁部の屈曲がやや弱い。口縁端部は下方に突出する。5は皿Bである。高台貼り付け時のナデが雑で、全体の作りもやや粗雑である。焼成はあまい。

溝85上層(図27・28) 須恵器、土師器、製塩土器、瓦が出土した。時期は8世紀後半と考えられる。6～13は須恵器である。6～8は杯蓋で、6は口縁部の屈曲が弱く、口縁端部は下方に大きく突出する。7は天井部と口縁部の境に幅5mm程ヘラケズリを施す。口縁端部は下方に突出する。8は口縁部の屈曲は弱い。口縁端部の突出は小さく、丸くおさめる。9は皿Cである。底部は平坦で口縁は直線的に斜上方へ立ち上がる。10は杯Bである。口縁が斜上方へ長く直線的に

伸びる。口縁端部はシャープに尖る。11は壺Eの口縁部である。口縁端部は拡張し、面をもつ。12・13は壺Aである。12は頸部が短く直立する。13は頸部がやや外反する。

14は土師器の皿Cで、磨滅が著しく調整は不明である。口縁部は外反する。15・16は製塩土器である。いずれも二次焼成を受け、体部の一部しか残存しない。15は胎土に砂粒を少量含み、外面は指ナデで、指押さえ痕が明瞭

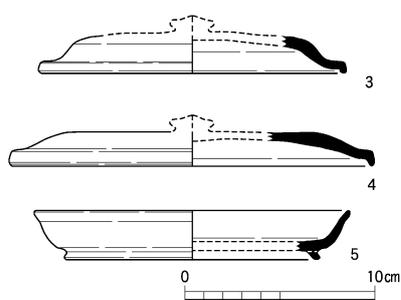


図26 落ち込み最上層出土土器実測図 (1:4)

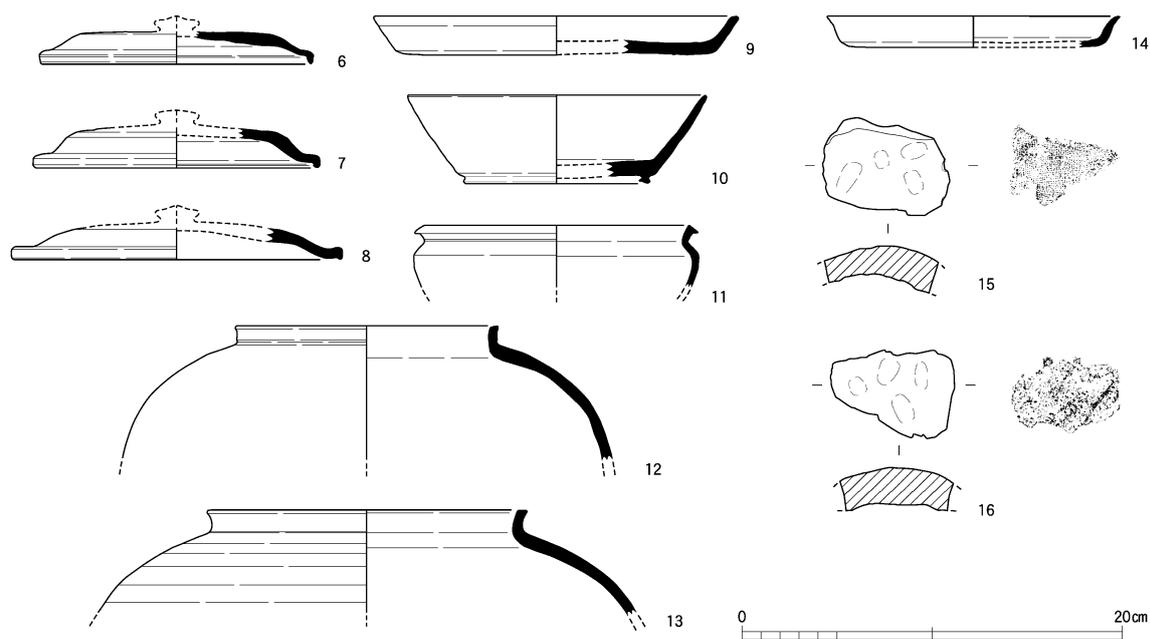


図27 溝85上層出土土器実測図 (1:4)

に残る。内面は布目が残存し、約2.5 cm間隔で板の継ぎ目と思われる痕跡が認められるため桶状の内型を用いた型作りと考えられる。16は胎土に1～2 mm程度の石英粒を多量に含む。外面は指ナデ成形で、指押さえ痕がのこる。内面は縦方向の指ナデで粘土紐の繋ぎ目を消しており、非型作りである。

瓦は4点出土した。全て平瓦で、いずれも磨滅が著しい。図化できたのは17～19の3点である。17は端部の一部が残存する。凸面は縄タタキ、凹面は細かい布目。布の継ぎ目や枠板痕跡は認められず

一枚作りの可能性がある。18は凸面縄タタキ、凹面は粗い布目。19は凸面縄タタキ、凹面はやや粗い布目で厚さは約2.4 cmあり、胎土には赤色砂粒を含むなど他の3点とは異なる点がみられる。

溝85下層(図29・30) 溝85の底からは、須恵器2点と瓦が出土した。7世紀半ば～後半の所産と考えられる。20は杯蓋である。短い返りの付く蓋で、天井部は3/4まで回転ヘラケズリが及ぶ。21は平瓶である。口縁部が欠損するがほぼ完存する。体部下半は短い単位のやや粗雑なヘラケズリを施す。

22は平瓦である。凹面布目、凸面は斜格子タタキで焼成はややあまい。

竪穴住居145(図31) 住居廃絶後に投棄されたと考えられる一群で、すべて須恵器である。時期は8世紀後半と考えられる。23～28は杯蓋である。23はほぼ完形である。天井部は扁平で、回転ヘラケズリを施す。扁平なつまみが付く。24は天井部が丸みをおびる。口縁端部は丸くおさめる。25は、口縁端部は下方へ突出する。26は天井部から口縁部にかけて丸みをおび、口縁端部は下方へ突出する。27は二次焼成を受ける。天井部は扁平で、口縁端部は丸くおさめる。28の天井部は扁平で、口縁端部は面をもち沈線がめぐる。29～34は杯Aである。29は口縁部が直線的に斜上方にのびる。端部は丸くおさめる。30はほぼ完形で、2次焼成を受

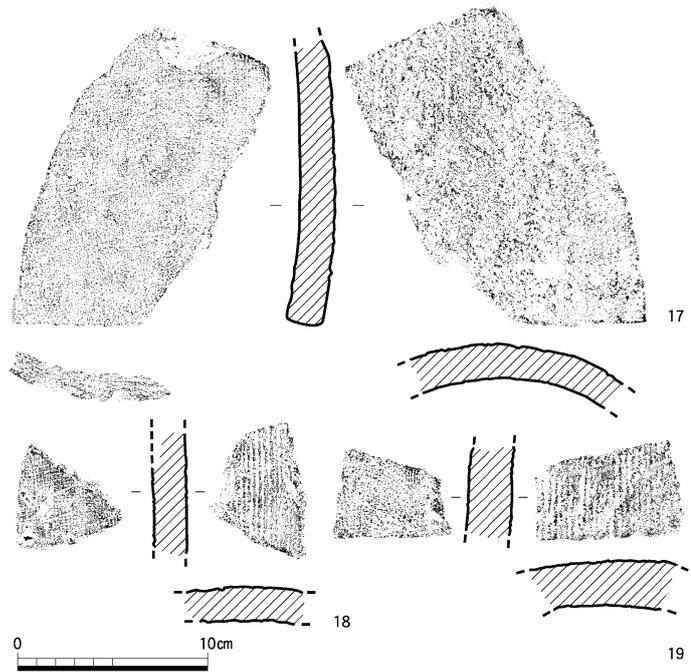


図28 溝85上層出土瓦拓影・実測図(1:4)

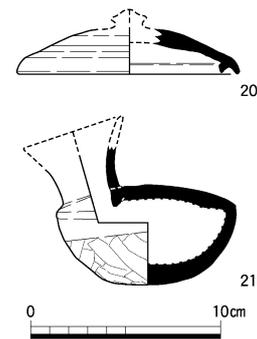


図29 溝85下層出土土器実測図(1:4)

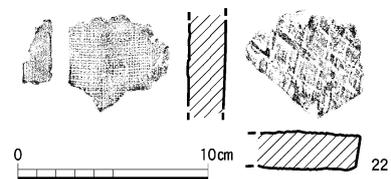


図30 溝85下層出土瓦拓影・実測図(1:4)

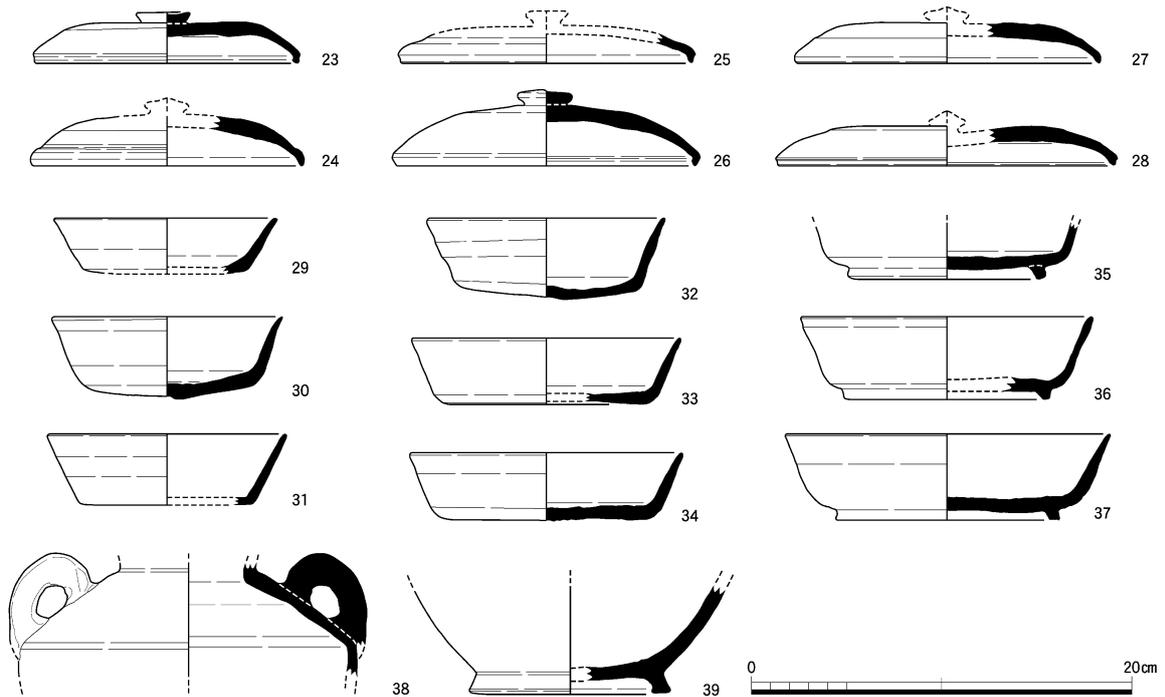


図 31 竪穴住居 145 出土土器実測図 (1 : 4)

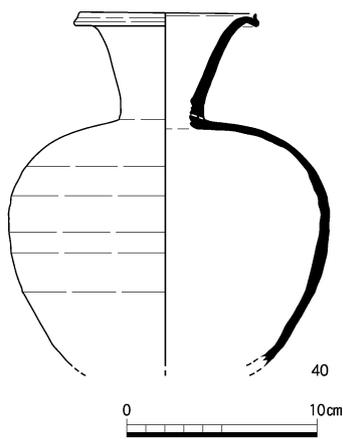
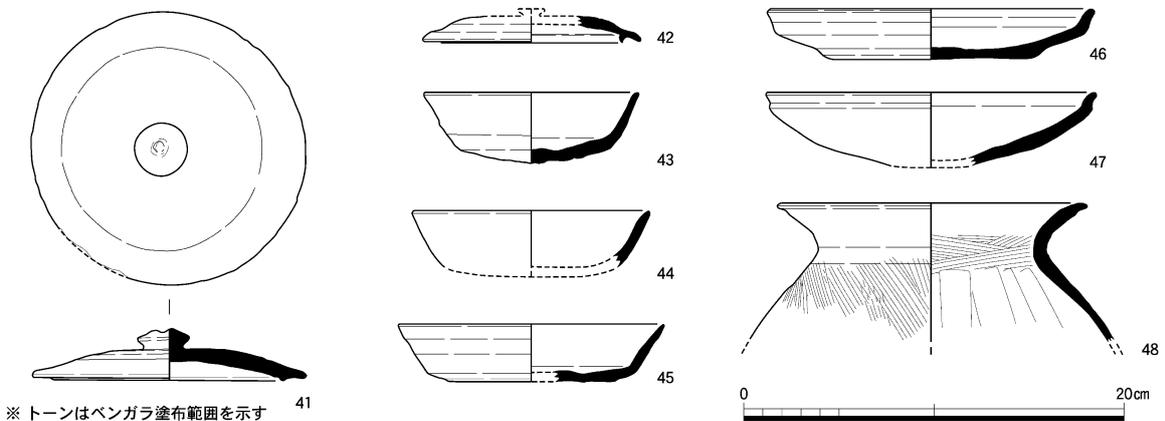


図 32 竪穴住居 144 埋土出土土器実測図 (1 : 4)

ける。口縁端部はやや外反する。31は、口縁部が直線的でシャープにのびる。32はほぼ完形である。二次焼成を受ける。口縁はやや外反ぎみに立ち上がる。33の口縁は直線的に斜上方に立ち上がる。34は、口縁の立ち上がりは短く、器高は低い。35～37は杯Bである。35・37は二次焼成を受ける。38は壺Qである。肩部に貼り付けの把手が付く。外面には自然釉が付着する。39は壺の底部である。厚みのある貼り付け高台をもつ。

竪穴住居 144 埋土 (図 32) 40は、古墳時代の竪穴住居 144の埋土に混入して出土した壺Lである。底部を欠損するが、他はほぼ完形で、8世紀後半の所産と考えられる。頸部は細く締



※ トーンはベンガラ塗布範囲を示す 41

図 33 竪穴住居 83 出土土器実測図 (1 : 4)

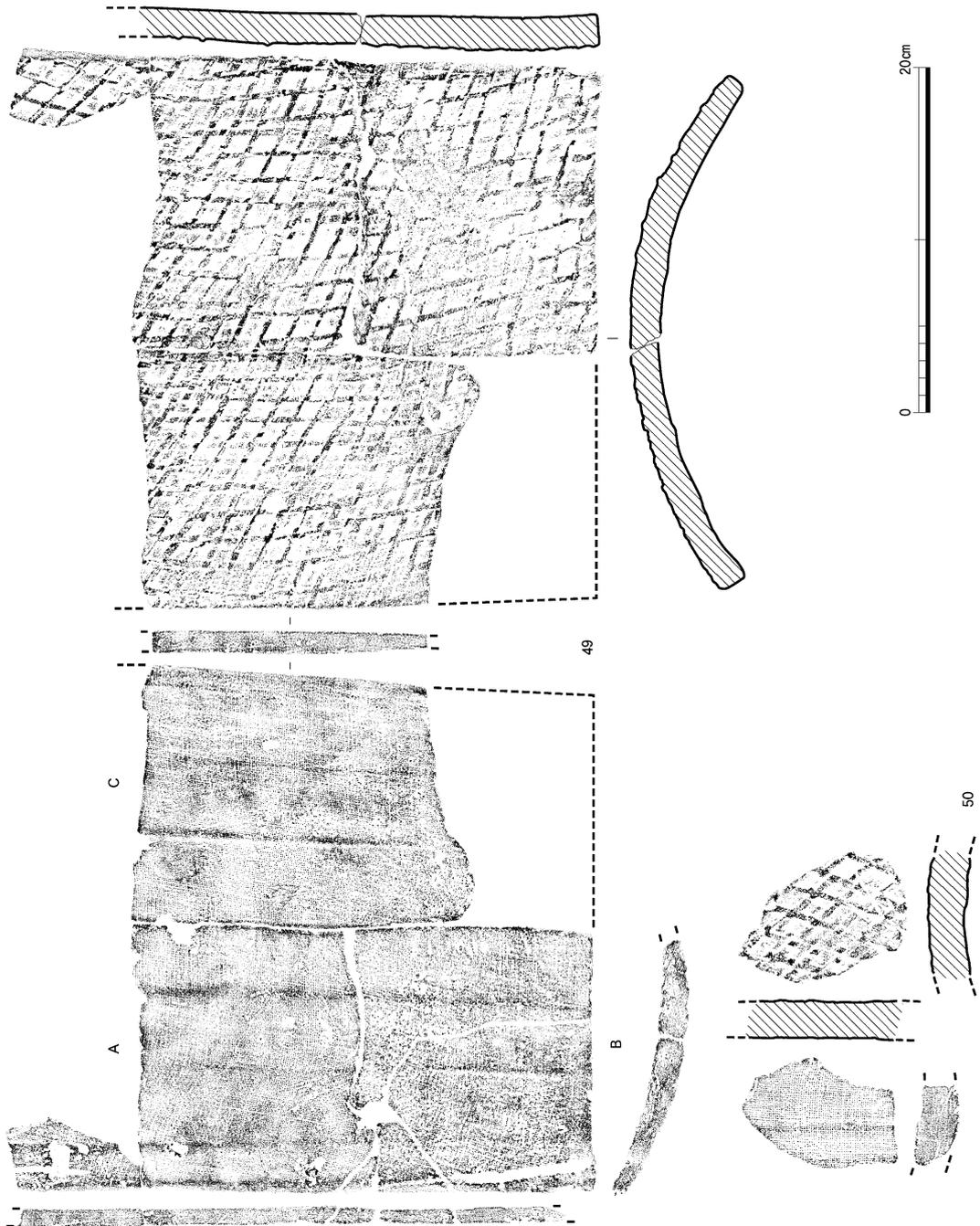


図34 竪穴住居83出土瓦拓影・実測図(1:4)

まり、口縁は大きく開いて端部を上方に摘み上げる。

竪穴住居83(図33~35)竈や床面直上、埋土から須恵器・土師器・瓦・鉄製品が出土した。41~47は須恵器である。須恵器の年代は8世紀初頭から前半に位置付けられる。41・42は杯蓋である。41は床面直上で出土した。形骸化した返りが付き、天井部は2/3までヘラケズリする。外面のほぼ全面



図35 竪穴住居83出土鉄製刀子実測図(1:2)

にベンガラが塗布される。42は埋土から出土した。返りが付くもので、天井部は1/2までヘラケズりする。43～45は杯Aである。埋土出土の43はほぼ完形である。口縁部分は二次焼成を受け、変色する。44は竈から出土した。著しく二次焼成を受ける。45は埋土から出土した。口縁はやや開きぎみに立ち上がる。46・47は皿Aである。46の底部は平底で未調整、口縁部は回転ナデで、上方に屈曲し、端部は丸くおさめる。47の底部は未調整で指オサエ痕がのこる。口縁部は強い横ナデにより外反し、端部は丸くおさめる。48は、土師器の甕である。二次焼成を受ける。くの字状口縁で口縁部外面横ナデ、内面横ハケ目を施す。体部は外面縦ハケ目、内面は板ナデである。

49・50は平瓦である。49-Aは竈の燃焼部床から出土したもの、49-B・Cは竈の内壁に使用されていたものであるが、すべて接合でき、元は同一個体であったものを分割して使用したことがわかる。復元した元の平瓦の最大幅は32cm、最大厚み1.9cmを測る。凹面は布目で、桶巻き作りの枳板痕が明瞭に残る。枳板一枚の幅は約4cmである。凸面は斜格子タタキで、格子の大きさは一辺約1.2cmの菱形である。胎土は粗く直径0.2～1.0cmの石粒を多量に含む。焼成はややあまい。50は竪穴住居の床面から出土したものである。最大厚みは2.3cmある。凹面布目、凸面斜格子タタキで、格子の大きさは一辺1.2～1.4cmの菱形である。胎土には少量の石粒を含む。焼成は堅緻。厚みや胎土が異なることから49とは別個体の破片と考えられる。

51は竈の燃焼部から出土した鉄製刀子である。残存長は8.6cm、幅は2.2cmある。全面に鉄錆が付着するため、正確な厚みは不明であるが、約2mm程度と推測される。

(4) 古墳時代の遺物

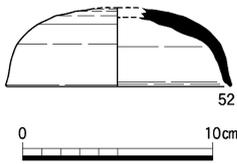


図36 竪穴住居146出土土器実測図(1:4)

竪穴住居146(図36)52は、竪穴住居146埋土から出土した須恵器杯蓋である。ヘラケズりは天井部の約2/3まで及ぶ。天井部と口縁部の境は明瞭でなく、丸みを帯びる。焼成は非常に良好で堅緻。MT15型式と考えられる。

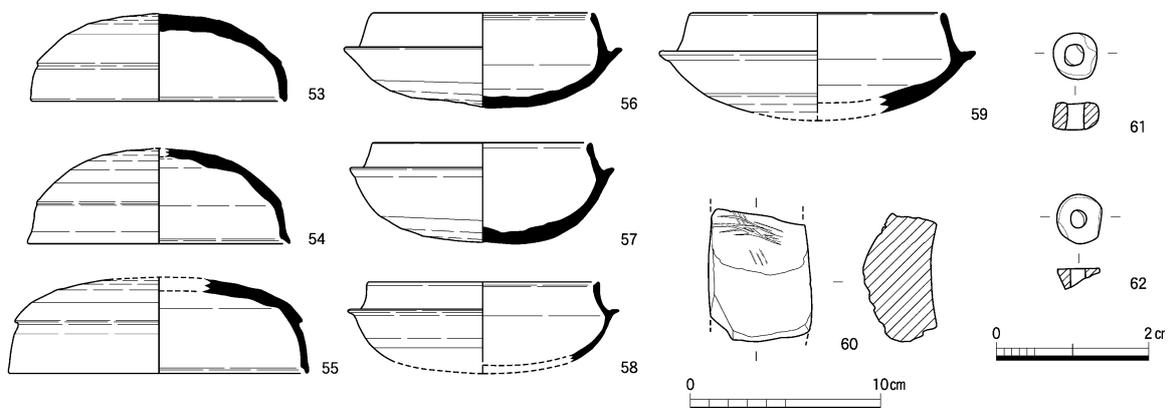


図37 竪穴住居147・土壙194・柱穴193出土遺物実測図(1:4、1:2)

ぼ完形で、天井部はやや扁平。焼成は良好である。54は焼成があまり、軟質。55は、竪穴住居147の貯蔵穴と考えられる土壙194から出土した杯蓋である。天井部は扁平で、口径は15.6cmある。ヘラケズリは天井部の約4/5まで及ぶ。胎土には砂粒を多量に含む。56は住居の床面直上から出土した須恵器杯身である。ほぼ完形で、底部はやや扁平、口縁の立ち上がりは直線的で長い。端部は内傾し浅い沈線がめぐる。焼成は良好。57は土壙194出土の杯身である。ほぼ完形。底部は丸みをおび、口縁の立ち上がりは直線的で短い。胎土に黒色砂粒を多量に含む。焼成は良好。58は壁溝から出土した杯身である。器壁が薄く、焼成は堅緻。受け部はシャープで、口縁はやや外反ぎみに立ち上がる。端部は内傾し、面を持つ。59は、床面直上で出土した杯身である。二次焼成を受け、磨滅が著しい。受け部は水平に伸び、やや厚みがある。口縁の立ち上がりは直線的で、端部は丸くおさめる。以上の須恵器は、MT15～TK10型式に位置付けられる。

60は、土壙194から出土した砥石である。石材は流紋岩と考えられる。表裏、両側面の4面に砥面が認められる。そのうち一面には幅約2mmの断面V字状の溝が数条はしる。61・62は、滑石製白玉である。61は、竪穴住居147の主柱穴193の掘形埋土、62は住居床面直上から出土した。ともに直径6mm、厚さ3mmで、中央に直径2mmの孔が開く。61は濃い緑色を呈し、62はやや薄い緑色を呈する。

竪穴住居149(図38・39) 63～65は住居の床面直上から出土した須恵器杯蓋である。63は器壁が薄く、焼成は堅緻である。天井部は丸みをもつ。口縁端部は内傾し、沈線がめぐる。64は口縁の立ち上がりが短く、端部は内傾し沈線がめぐる。天井部は丸みをもち、自然釉が付着する。65は口縁の一部のみ残存する。口径が大きく、器壁はやや厚い。66～68は杯身である。66は竈から、67・68は住居床面直上で出土した。66は焼成があまり、色調は白色を呈する。底部はやや扁平である。受け部はシャープで、口縁は外反ぎみに立ち上がる。端部は内傾して、沈線がめぐる。67は著しく二次焼成を受け、磨滅が著しい。底部のヘラケズリは1/3にとどまる。口縁の立ち上がりは直線的で、端部は内傾して面をもつ。68は口縁の一部のみ残存する。口縁の立ち上がりは直線的で、端部は内傾し面を持つ。69～71は須恵器有蓋高杯である。住居南側の床面直上で3個体がまとまって出土した。いずれもほぼ完形である。69は、焼成が非常に堅緻で、

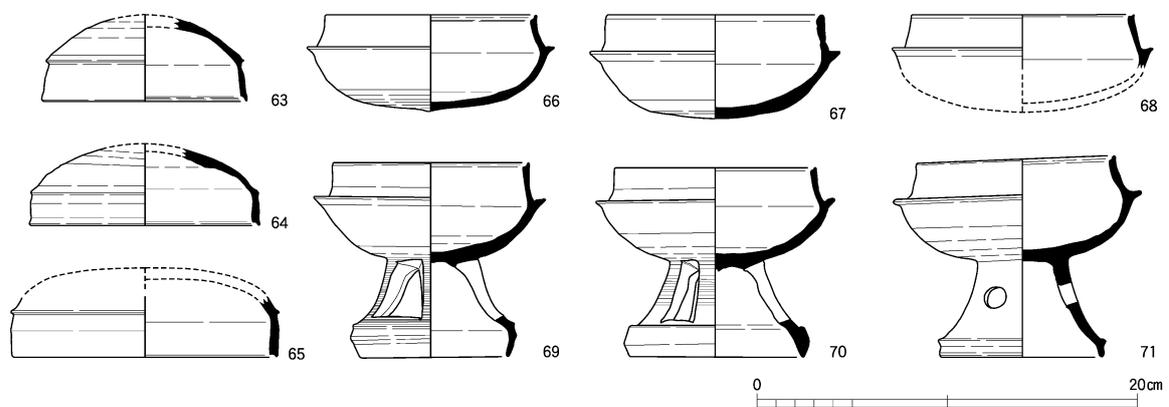


図38 竪穴住居149出土土器実測図(1:4)

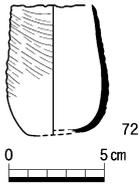


図 39 竪穴住居 149 出土製塩土器実測図 (1:4)

胎土に砂粒を多量に含む。色調は灰色を呈する。杯底部は丸みをもち、ヘラケズリは 1/3 まで施す。口縁の立ち上がりは直線的で長く、端部は内傾し、やや深い沈線がめぐる。脚部には方形の三方透かしを入れる。脚柱部全体にカキ目を密にめぐらす。脚端部は屈曲して内湾する。70 は、焼成がややあまく、色調は灰白色を呈する。胎土には砂粒を少量含む。杯底部は丸みをもち、ヘラケズリは 2/3 まで及ぶ。口縁の立ち上がりは直線的で、端部は内傾して沈線がめぐる。脚部には方形の三方透かしを入れる。脚柱部にはカキ目をめぐらす。脚端部は直線的に立ち上がる。71 は、焼成は堅緻、色調は灰白色を呈する。胎土に砂粒を微量含む。杯底部はやや扁平で、ヘラケズリは 2/3 まで及ぶ。口縁の立ち上がりは内傾する。端部は内傾して沈線がめぐる。脚部には円形の三方透かしを入れる。脚端部の立ち上がりは短い。

以上の須恵器は、65・68 は MT15 型式、それ以外は TK47 型式と考えられる。

72 は壁溝から出土した製塩土器である。ほぼ完形で、口縁径が体部最大径より小さい砲弾型である。器壁は薄く、外面は左上がりのタタキ、内面はナデで仕上げる。二次焼成を受ける。

土壌 70 (図 40) 土師器と須恵器が一括で出土した。73～76 は土師器甕である。73 は焼成を受け磨滅が著しい。くの字状口縁で、端部は面をもつ。口縁部外面縦方向のナデ、内面横ハケ目、体部外面縦ハケ目、内面はヘラケズリを施す。74 は長胴甕で、口縁は内弯し、端部は内傾して面をもつ。口縁部横ナデ、体部外面縦ハケ目、内面ヘラケズリで仕上げる。75 は、口縁部が内弯し、

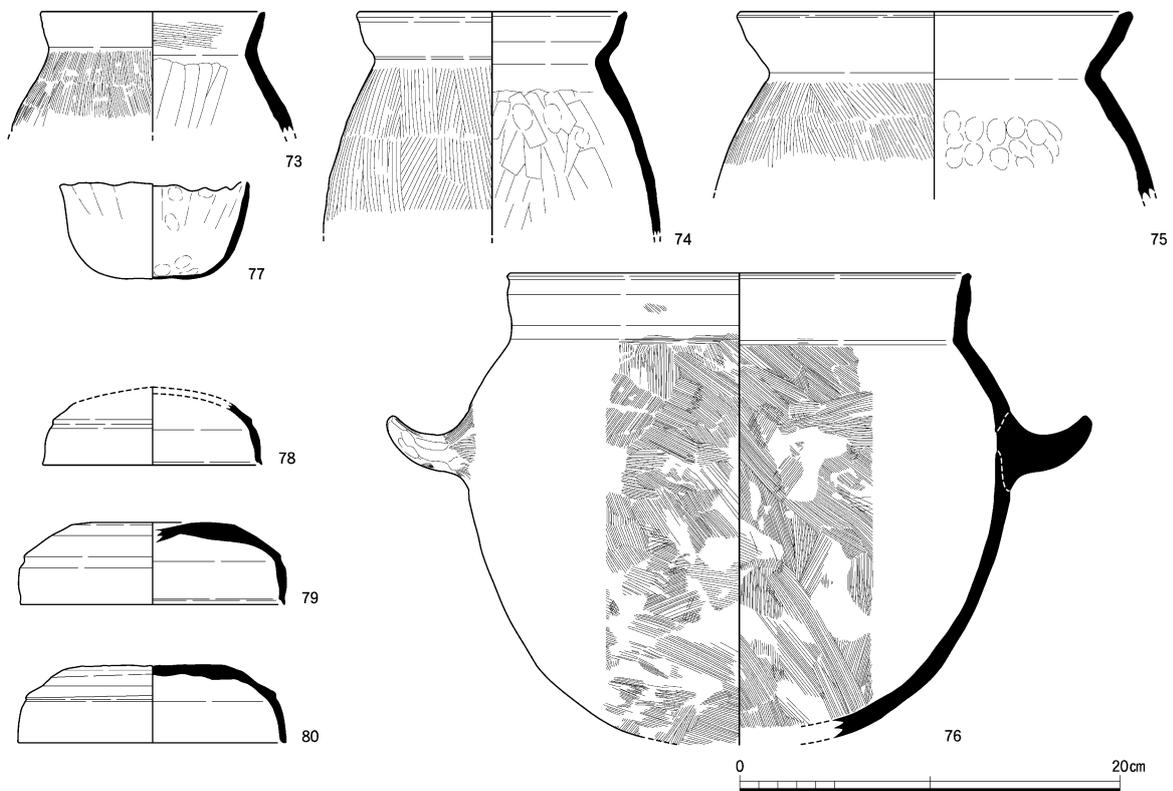


図 40 土壌 70 出土土器実測図 (1:4)

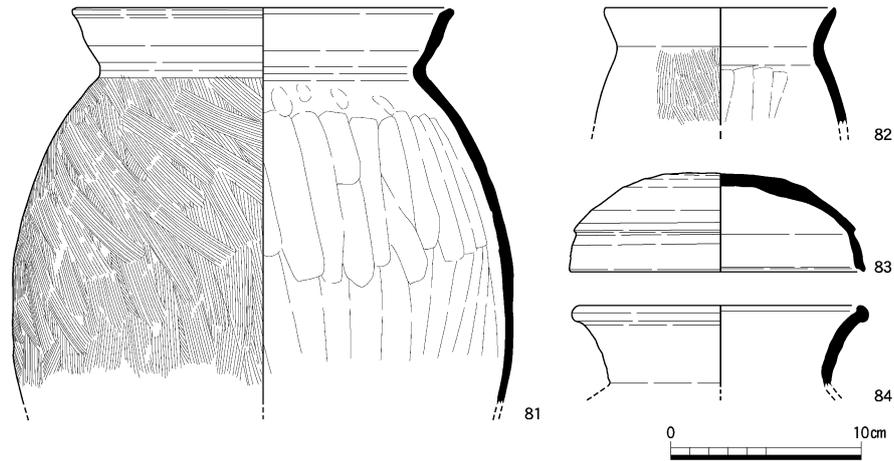


図 41 土壙 58・214 出土土器実測図（1：4）

端部は内傾して面をもつ。口縁部横ナデ、体部外面は縦ハケ目で、内面上半は指オサエ痕が顕著にみられる。76は把手付甕である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁部横ナデ、把手部はナデで仕上げる。体部は外面は単位の細かいハケ目、内面は不定方向のハケ目を施す。77は土師器の椀である。二次焼成を強く受ける。全体が手づくねで成形され、器壁は薄い。78～80は須恵器杯蓋である。78は口縁の一部のみ残存する。器壁は薄く、焼成は良好。79は、天井部は扁平でヘラケズリは2/3まで及ぶ。口縁の立ち上がりは直線的で端部には沈線がめぐる。焼成は良好。80は焼成があまくやや軟質。天井部は扁平で、ヘラケズリは2/3まで及ぶ。口縁の立ち上がりは丸みを持ち、端部は面をもつ。これら須恵器はMT 15型式と考えられる。

土壙 58（図 41）土師器と須恵器がある。81は土師器甕である。長胴で、口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部は内傾して面をもつ。口縁部は横ナデ、体部外面縦ハケ目、内面はヘラケズリで、頸部直下には指オサエ痕がのこる。

土壙 214（図 41）82は、土師器甕である。口縁部の屈曲は弱く、短く立ち上がる。口縁部ナデ、体部外面縦ハケ目、内面ヘラケズリを施す。83は須恵器杯蓋で、ほぼ完形である。天井部はやや丸みを持ち、ヘラケズリは5/6まで及ぶ。口縁端部は内傾して沈線がめぐる。焼成は良好。MT 15型式と考えられる。84は須恵器甕の口縁部である。口縁端部は上方に摘み上げる。焼成は良好。

竪穴住居 144・ピット 74（図 42）85は古墳時代後期の竪穴住居 144 埋土から出土した石錘である。石材は粘板で、扁平な石の両端を打ち欠く。この種の石錘は古墳時代後期にはあまり見られないこと¹¹⁾から、混入の可能性はある。86はピット 74 から出土した管状土錘である。側面形は長方形の円筒で、中央に直径約5mmの孔が貫通する。胎土は精良。

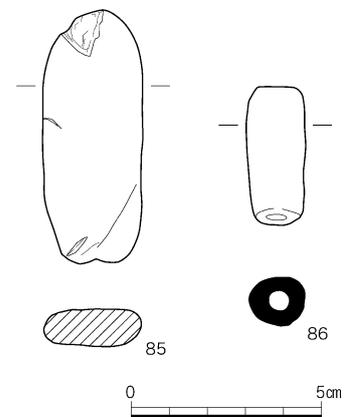


図 42 竪穴住居 144・ピット 74 出土遺物実測図（1：2）

土壙 207（図 43）87は、土師器の椀である。二次焼成を受

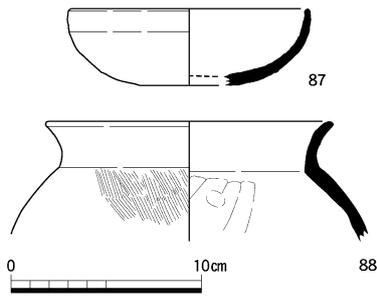
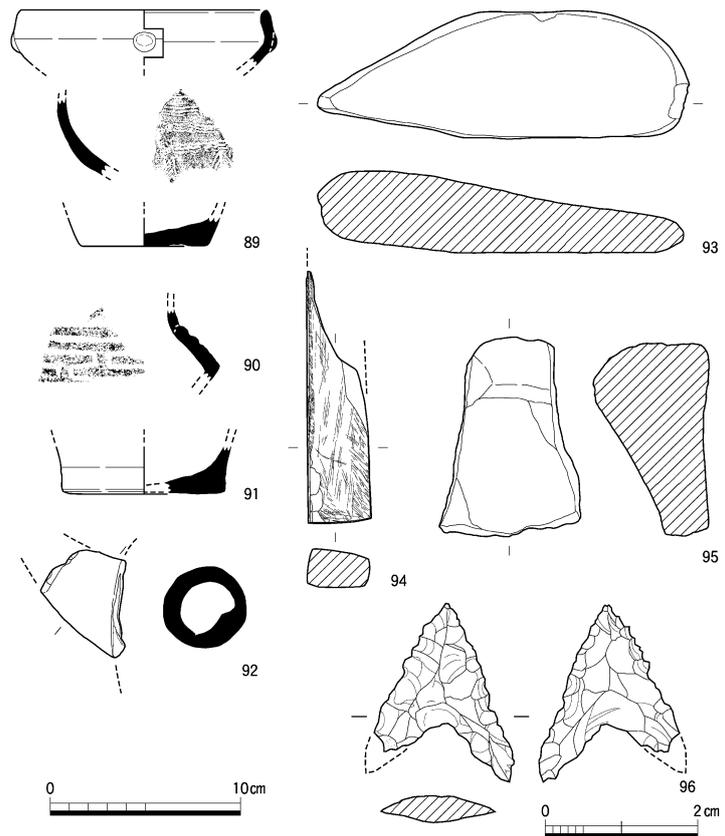


図43 土壌207出土土器実測図(1:4)

け、磨滅が著しい。口縁部は横ナデするが、他は調整不明。88は、土師器甕である。くの字状口縁で、口縁は外反し、端部は丸くおさめる。口縁部ナデ、体部外面縦ハケ目、内面はヘラケズリで、一部指オサエ痕がつく。



(5) 縄文時代から弥生時代の遺物 (図44) 図44 縄文時代から弥生時代の遺物実測図(1:4、石鏃1:1)

氾濫堆積物と考えられる遺物包含層から出土した縄文時代から弥生時代の主な遺物をまとめる。89は弥生土器の壺である。口縁・頸部・底部の破片がまとまって出土した。中期前半頃に位置付けられる短頸壺と考えられる。口縁部は内折し、逆くの字状を呈する。屈曲部には円形浮文を貼り付ける。残存する頸部には3条1単位の直線文2帯、波状文2帯、綾杉文が確認できる。底部は平底で未調整である。90～92は、縄文時代後期から晩期に帰属すると考えられる土器である。90は鉢の体部。外面には工字文状の磨消縄文がみられる。胎土には角閃石を含む。91は、深鉢の底部と考えられる。胎土には角閃石を多く含む。92は注口土器の注口部分である。

93～96は石器である。93は砥石で、全ての面に砥ぎ面が認められる。先端は打ち欠かれる。石材は砂岩。94は、柱状片刃石斧の基部である。刃部は欠損する。石材は粘板岩。95は砂岩製の石皿である。上下面ともに凹み、刷り面が認められる。96は、凹基式の打製石鏃である。石材はサヌカイト。基部の一方を欠損する。風化が進む。

表3 遺物一覧表

No.	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	焼成・色調	その他技法・特徴
1	土師器	皿A	掘立柱建物5 柱穴18	20.3	2.0		良好・10YR8/3浅黄 橙色	15%残存 磨滅著しい
2	須恵器	壺E	掘立柱建物5 柱穴12	9.0	6.5	5.8	良好・N7/0灰白色	30%残存
3	須恵器	杯蓋	落ち込み最上層	16.0			良好・N7/0灰白色	20%残存
4	須恵器	杯蓋	落ち込み最上層	18.9			良好・N6/0灰色	20%残存
5	須恵器	皿B	落ち込み最上層	16.4	2.6	13.2	軟質・5Y8/1灰白色	20%残存
6	須恵器	杯蓋	溝85上層	14.1			良好・N6/0灰色	15%残存
7	須恵器	杯蓋	溝85上層	14.8			良好・N7/0灰白色	15%残存
8	須恵器	杯蓋	溝85上層	17.2			良好・N7/0灰白色	15%残存
9	須恵器	皿C	溝85上層	19.0	2.1		良好・N6/0灰色	20%残存
10	須恵器	杯B	溝85上層	15.6	7.1	9.6	良好・N6/0灰色	20%残存
11	須恵器	壺E	溝85上層	14.0			良好・N5/0灰色	15%残存
12	須恵器	壺A	溝85上層	13.7			良好・N7/0灰白色	15%残存
13	須恵器	壺A	溝85上層	16.0			良好・N6/0 灰色	20%残存
14	土師器	皿A	溝85上層	15.3	1.6		良好・2.5YR6/6橙色	10%残存 磨滅著しい
15	土師器	製塩土器	溝85上層				良好・10YR5/2灰黄 褐色	外面二次焼成受ける 最大厚0.7cm 白色砂粒多量含
16	土師器	製塩土器	溝85上層				良好・7.5YR5/3にぶ い褐色	外面二次焼成受ける 最大厚1.8cm 白色砂粒少量含
17	瓦	平瓦	溝85上層				良好・N7/0 灰白色	磨滅著しい 厚み1.8cm
18	瓦	平瓦	溝85上層				良好・N6/0灰色	厚み1.8cm
19	瓦	平瓦	溝85上層				良好・5YR7/4にぶ い橙色	厚み2.4cm
20	須恵器	杯蓋	溝85下層	8.7			良好・N7/0灰白色	胎土に0.5~3mmの白色砂粒多量含
21	須恵器	平瓶	溝85下層				良好・N6/0灰色	体部最大径9.5cm
22	瓦	平瓦	溝85下層				良好・10YR8/1灰白 色	最大厚2.0cm 3mm以下の黒色砂粒少量 含
23	須恵器	杯蓋	竪穴145	13.7	2.7		良好・N6/0灰色	95%残存
24	須恵器	杯蓋	竪穴145	14.0			良好・N6/0灰色	20%残存
25	須恵器	杯蓋	竪穴145	15.2			良好・N6/0灰色	口縁部50%残存
26	須恵器	杯蓋	竪穴145	15.6	4.0		良好・	35%残存
27	須恵器	杯蓋	竪穴145	15.9			やや軟・N7/0灰白色	30%残存
28	須恵器	杯蓋	竪穴145	17.5			良好・N6/0灰色	20%残存
29	須恵器	杯A	竪穴145	11.6	2.9		良好・N7/0灰白色	30%残存
30	須恵器	杯A	竪穴145	11.9	4.4		やや軟・N7/0灰白色	ほぼ完存
31	須恵器	杯A	竪穴145	12.4	3.8		良好・N5/0灰色	30%残存
32	須恵器	杯A	竪穴145	12.4	4.4		やや軟・N7/0灰白色	ほぼ完存 胎土に砂粒多量含 磨滅著 しい
33	須恵器	杯A	竪穴145	14.0	3.5		良好・2.5Y5/1黄灰色	40%残存
34	須恵器	杯A	竪穴145	14.2	3.6		良好・N6/0灰色	40%残存
35	須恵器	杯B	竪穴145			9.4	軟質・2.5Y8/1灰白色	60%残存
36	須恵器	杯B	竪穴145	15.2	5.4	10.1	良好・N6/0灰色	20%残存

No.	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	焼成・色調	その他技法・特徴
37	須恵器	杯B	竪穴145	17.0	4.6	11.6	やや軟・N7/0灰白色	60%残存
38	須恵器	壺Q	竪穴145				良好・N7/0灰白色	肩部径17.8cm 20%残存
39	須恵器	壺底部	竪穴145			8.7	良好・N4/0灰色	10%残存
40	須恵器	壺L	竪穴144埋土	9.2			良好・N7/0灰白色	70%残存
41	須恵器	杯蓋	竪穴83	12.0	2.3		やや軟・N7/0灰白色	ほぼ完存 外面全体にベンガラを塗布 ベンガラの色調は2.5YR5/4にぶい赤 褐色
42	須恵器	杯蓋	竪穴83	9.4			良好・N7/0灰白色	20%残存
43	須恵器	杯A	竪穴83	11.2	3.8		良好・N5/0灰色	ほぼ完存
44	須恵器	杯A	竪穴83竈	12.4			軟質・10YR8/2灰白色	20%残存 磨滅著しい
45	須恵器	杯A	竪穴83	13.9	3.1		良好・N5/0灰色	20%残存
46	須恵器	皿A	竪穴83	16.8	2.7		良好・	60%残存
47	須恵器	皿A	竪穴83竈	17.3			良好・N7/0灰白色	40%残存 底部に指オサエ痕あり
48	土師器	甕	竪穴83	15.7			良好・7.5YR8/2灰白 色	20%残存 体部外面縦刷毛目内面板ナ デ 胎土に1~2mmの砂粒多量含
49 -A	瓦	平瓦	竪穴83竈				やや軟・7.5YR7/4に ぶい橙色	49-B・Cと同一個体 竈床面出土 最 大厚1.9cm 胎土に2~10mmの石粒含
49 -B	瓦	平瓦	竪穴83竈				やや軟・2.5Y8/1灰白 色	49-A・Cと同一個体 竈の西壁に使用 最大厚1.8cm 胎土に2~10mmの石粒含
49 -C	瓦	平瓦	竪穴83竈				やや軟・2.5Y8/1灰白 色	49-A・Bと同一個体 竈の東壁に使用 最大厚1.7cm 胎土に2~10mmの石粒含
50	瓦	平瓦	竪穴83				良好・7.5YR5/6明褐 色	竪穴床面出土 最大厚2.3cm 胎土に 2mm以下の石粒少量含
51	鉄製品	刀子	竪穴83竈					全体に錆付着 残存長約8.6cm、幅約 2.2cm
52	須恵器	杯蓋	竪穴146	11.8			良好・N6/0灰色	25%残存
53	須恵器	杯蓋	竪穴147竈	13.3	4.6		良好・N6/0灰色	90%残存
54	須恵器	杯蓋	竪穴147竈	13.7	5		やや軟・2.5Y8/1灰白 色	25%残存
55	須恵器	杯蓋	土壙194	15.6	5		良好・N7/0灰白色	40%残存 土壙194は竪穴147の貯蔵穴
56	須恵器	杯H	竪穴147	11.6	5.1		良好・N5/0灰色	80%残存 床面土器溜まり出土
57	須恵器	杯H	土壙194	11.4	5.4		良好・N6/0灰色	ほぼ完存 土壙194は竪穴147の貯蔵穴
58	須恵器	杯H	竪穴147	12			良好・N6/0灰色	15%残存 壁溝出土
59	須恵器	杯H	竪穴147	13.3	5.3		良好・N6/0灰色	40%残存 床面土器溜まり出土 やや 磨滅
60	石製品	砥石	土壙194					土壙194は竪穴147の貯蔵穴 粘板岩製 残存長5.8cm、幅5.3cm、厚さ3.5cm 一 面に0.5~1mmの断面V字状の溝がはしる
61	石製品	白玉	柱穴193掘形					柱穴193は竪穴147の主柱穴 滑石製 直径約6mm、厚さ約3mm 中央に直径 約2mmの孔
62	石製品	白玉	竪穴147					床面出土 滑石製 直径約6mm、厚さ 約2.5mm 中央に直径約2mmの孔
63	須恵器	杯蓋	竪穴149	10.8			良好・N5/0灰色	30%残存 部分的に自然釉付着
64	須恵器	杯蓋	竪穴149	12			良好・N6/0灰色	90%残存 南壁溝沿い出土 自然釉微 量付着
65	須恵器	杯蓋	竪穴149	13.9			良好・N6/0灰色	10%残存
66	須恵器	杯H	竪穴149竈	11			良好・2.5Y7/1灰白色	70%残存
67	須恵器	杯H	竪穴149	11	5.5		不明・10YR7/2明褐 灰色	70%残存 著しく二次焼成を受ける

No.	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	焼成・色調	その他技法・特徴
68	須恵器	杯H	竪穴149	11.6			良好・N7/0灰白色	10%残存
69	須恵器	高杯	竪穴149	10.2	10.4	7.7	良好・N5/0灰色	完形 1～1.5mm間隔のカキ目 胎土には1～6mmの砂粒やや多く含
70	須恵器	高杯	竪穴149	10.5	10.1	9.1	良好・N8/0灰白色	完形 1.5～2mm間隔のカキ目 胎土1～2mmの砂粒少量含
71	須恵器	高杯	竪穴149	10.4	10.7	8.4	良好・N8/0灰白色	90%残存 胎土1～4mmの砂粒少量含
72	土師器	製塩土器	竪穴149壁溝	4.2	6.9		良好・7.5YR7/4にぶい橙色	90%残存 二次被熱 外面左上がりのタタキ(7本/3cm) 胎土1～3mmの石英・長石多量含
73	土師器	甕	土壙70	11.7			良好・7.5YR5/3にぶい橙色	20%残存 二次被熱 磨滅著しい 外面縦ハケ目内面ヘラケズリ 胎土1～3mm石英・長石多量含
74	土師器	甕	土壙70	13.9			良好・10YR4/2灰黄褐色	30%残存 胎土0.5～2mmの石英・長石、雲母多量含
75	土師器	甕	土壙70	20.4			良好・7.5YR8/3浅黄橙色	30%残存 二次焼成受ける 胎土0.5～2mmの石英・長石、雲母多量含
76	土師器	甕	土壙70	24.1			良好・10YR5/4にぶい黄褐色	40%残存 把手2つ付く 胎土0.5～1mmの石英・長石少量含、雲母少量含
77	土師器	—	土壙70	9.9	5.1		良好・7.5YR7/6橙色	50%残存 二次焼成受ける 手づくね成形 胎土0.5～4mmの石英・長石多量含
78	須恵器	杯蓋	土壙70	11.5			良好・N7/0灰白色	10%残存
79	須恵器	杯蓋	土壙70	13.8	4.4		良好・N7/0灰白色	70%残存 全体的に歪む
80	須恵器	杯蓋	土壙70	14.9	4.1		良好・2.5Y7/1灰白色	70%残存
81	土師器	甕	土壙58	19.7			良好・10YR7/3にぶい黄橙色	60%残存 胎土0.5～1mmの石英・長石多量含、雲母少量含
82	土師器	甕	土壙214	12.0			良好・10YR6/2灰黄褐色	15%残存 磨滅著しい 胎土1～2mmの石英・長石多量含
83	須恵器	杯蓋	土壙214	15.3	5.2		良好・N6/0灰色	ほぼ完存
84	須恵器	甕	土壙214	14.7			良好・N5/0灰色	口縁部の30%残存
85	石製品	石錘	竪穴144					全長6.7cm、幅2.6cm、最大厚1.2cm 粘板岩製 両端に切り込み有り
86	土製品	土錘	ピット74				良好・10YR8/3浅黄橙色	全長3.7cm、直径約1.3cmの円筒形 中央に直径約0.5cmの孔が貫通 胎土は精良
87	土師器	—	土壙207	12.4			良好・2.5Y6/3にぶい黄色	30%残存 二次焼成受け磨滅著しい 調整不明
88	土師器	甕	土壙207	14.7			良好・5YR5/6明赤褐色	20%残存 磨滅著しい 胎土0.5～6mmの石英・長石多量含
89	弥生土器	壺	遺物包含層	12.8		6.4	良好・7.5YR7/4にぶい橙色	長頸壺 口縁部・頸部・底部の約10%残存 磨滅著しい 胎土は0.5～1mmの砂粒多量含
90	縄文土器	鉢	遺物包含層				良好・2.5YR6/4にぶい橙色	磨滅著しい 外面工字文状 胎土1mm以下の砂粒多量含
91	縄文土器	底部	遺物包含層			7.8	良好・7.5YR5/4にぶい褐色	底部の40%残存 磨滅著しい 胎土0.5～2mmの砂粒多量含
92	縄文土器	注口	遺物包含層				良好・7.5YR7/6橙色	注口土器の注口部のみ残存 磨滅著しい 胎土精良0.5mm以下の砂粒少量含
93	石製品	砥石	遺物包含層					砂岩製 全長19.5cm、幅6.7cm、最大厚3.9cm
94	石製品	柱状片刃石斧	遺物包含層					粘板岩製 残存長13.3、幅3.3、最大厚1.9
95	石製品	石皿	遺物包含層					砂岩製 残存長10.6cm、残存幅7.4cm、最大厚6.0cm 両面磨り面として利用
96	石製品	石鏃	遺物包含層					サヌカイト製 風化する 長さ2.3cm、最大厚0.35cm 一方の先端欠ける

5. まとめ

今回の調査では、古墳時代から近世までの長期間にわたる遺構を検出した。また、遺物だけでいえば、縄文時代や弥生時代の遺物も含まれる。そこで、当調査地の歴史的景観変遷を簡単にまとめ、各時期において明らかになった点と問題点を明確にしたい。

縄文時代から弥生時代に属する遺構は認められなかったが、その時期の遺物片を包含する均質なシルト層が厚く堆積することから、この時期には、今調査地は自然堤防の形成時期にあたり、居住域とするには不安定であったと考えられる。氾濫堆積であるシルト層に含まれる遺物は、周辺から運ばれてきたものであろう。調査区東で検出した大規模な落ち込みは後背湿地であったと考えられる。この落ち込みは奈良時代まで残るが、西側には古墳時代中期末から後期前半頃の

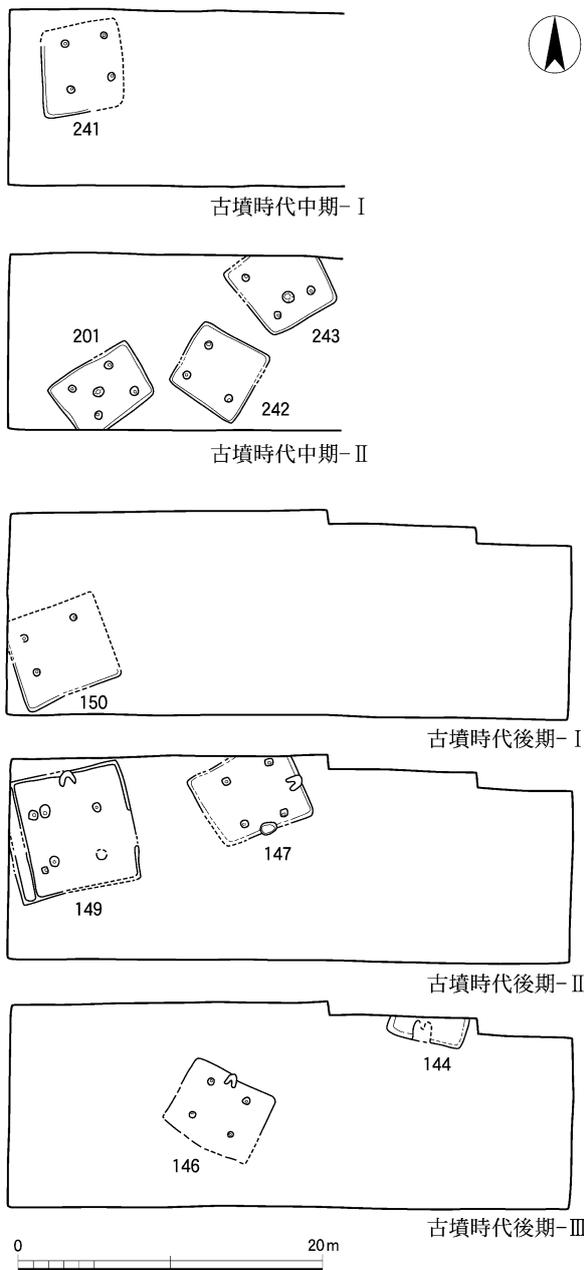


図 45 古墳時代の遺構変遷図 (1 : 500)

穴住居が作られていることから、この頃には地盤がやや安定するとみられ、集落の一部となったことがわかる。古墳時代中後期の竪穴住居については、検出面と遺構の重複関係、方位の振れ、出土遺物の年代からみて、図 45 に示した変遷が考えられる。この中で、古墳時代後期 - II の竪穴住居 149 は、今回検出した中で最も規模が大きく、完形の須恵器有蓋高杯 3 点や、内陸部では稀な製塩土器が出土するなど、他の住居とは異なる特徴をもち、集落の中心的な建物であった可能性がある。また、同時期の竪穴住居 147 からは、滑石製の白玉 2 点と砥石が出土している。これに関連して、調査地の南東約 300 m で 2005 年に行われた調査で古墳時代の竪穴住居や溝から未製品を含む多数の勾玉模造品・管玉・白玉が出土していることから、調査地周辺は玉造に関連する工人を内包する集落であった可能性も考えられる。

6 世紀後半から 7 世紀代は遺構・遺物ともに希薄であるが、7 世紀末頃に再び集落域に含まれ、調査地周辺での活動が活発化すると考えられる。図 46 は、7 世紀末～9 世紀初頭の遺構の変遷を示したものである。奈良時代 I 期に認められた東側の落ち込みに繋がる溝群が II 期までに埋まり、生活環境が安定

したと考えられ、Ⅱ期には総柱の掘立柱建物 170 や竈付きの竪穴住居 83 が建てられる。8 世紀半ば頃と考えられるⅢ期には東側の落ち込みもほぼ埋まり、より環境が安定したと考えられ、竪穴住居が構築されている。これら、奈良時代の建物はすべて正方位を向く。周辺は、8 世紀には葛野郡の一部となることから、条里地割との関連が窺える。周辺調査でも、奈良時代の遺構や遺物の出土が報告されており、一帯が奈良時代の中心的集落の一つであったと考えられる。

平安時代に入ると、平安京域に組み込まれる。今調査では、山小路に面した区画で 9 世紀初頭の掘立柱建物と柵を検出したが、遺物量は希薄で、短期間しか利用されなかったことがわかる。これ以後の遺構は中近世の耕作溝や土取り穴のみで、現代に至るまで居住域としては利用されなかったと考えられる。

以上、当調査地における、遺構の変遷を概略した。微地形の形成過程の一端が垣間見え、さらに複合遺跡であることが明確になった。中でも古墳時代後期と奈良時代においては、当地域の集落の中心域であった可能性が見出せたことは大きな成果である。特に、京都盆地における奈良時代の集落の実態については不明な点も多く、今後の研究への足掛かりとなる成果と言える。また、平安京域に於いては、それ以前の遺構が良好に残存する例は稀であり、周辺の調査事例の増加が期待される。今後は、これまで蓄積したデータをもとに、より広範囲での集落の変遷を明らかにしていく必要がある。

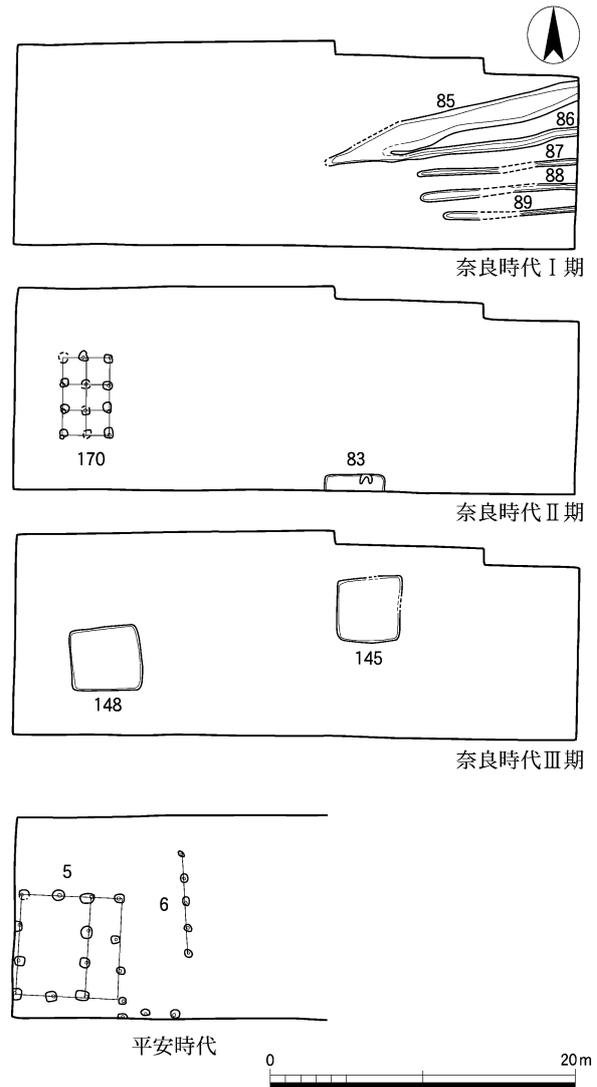


図 46 奈良時代から平安時代の遺構変遷図（1：500）

註

- 1) 京都市埋蔵文化財調査センター編『京都市遺跡地図台帳』京都市文化市民局 2003 年
- 2) 木下保明・西森正晃『平安京右京五条三坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-7（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006 年
- 3) 山下秀樹編『平安京右京六条四坊九町・五条大路』京都文化博物館 1991 年
- 4) 吉本健吾・堀内寛昭「平安京右京六条四坊八町、西京極遺跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成 13 年度』京都市文化市民局 2002 年

- 5) 伊藤 潔「平安京右京五条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6) 上村和直・西大條 哲「平安京右京六条四坊・西京極遺跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 7) 未報告。京都市文化市民局文化財保護課のご教示を得た。
- 8) 前掲註2に同じ。
- 9) 須恵器の型式名については、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年に従った。
- 10) 奈良時代の土器の形式分類は、奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告XVI』2005年に従った。
- 11) 大野左千夫「漁労」『古墳時代の研究』第4巻 生産と流通I 雄山閣 1991年
- 12) 未報告。京都市文化市民局文化財保護課のご教示を得た。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょうしぼうはっちょうあと・にしきょうごくいせき							
書名	平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-14							
編著者名	柏田有香							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 ろくじょうしぼうはっちょうあと 六条四坊八町跡 にしきょうごくいせき 西京極遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 さいいんつきそうちょう 西院月双町82	26100	931	34度 59分 53秒	135度 43分 18秒	2006年7月 24日～2006 年9月25日	495m ²	建物新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西京極遺跡	集落跡	縄文時代		縄文土器、石製品				
平安京右京 六条四坊八町跡	都城跡	弥生時代		弥生土器、石製品				
		古墳時代	竪穴住居、土壇、 ピット	土師器、須恵器、土製 品、石製品				
		奈良時代	掘立柱建物、竪穴 住居、溝	土師器、須恵器、瓦、 金属製品				
		平安時代	掘立柱建物、柵、 柱穴	土師器、須恵器				
		江戸時代	土壇	焼締陶器、施釉陶器、 磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-14
平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡

発行日 2006年11月30日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961